

台所からアジアを見よう

バナナ



はじめに

バナナは日本とフィリピンの関係を考えるとき、象徴的な商品となっています。バナナは高価で、庶民の口には年に数回、特別なときでないと入らない果物でした。しかし今では安く、手軽に手に入るようになっていきます。

かつてフィリピンは東南アジアの国々のなかでも最も対日感情の悪い国でした。いうまでもなく、戦時中の日本軍の残虐な行為の記憶が貧しい庶民の中にも鮮烈に残っているからです。しかし、マルコス前大統領が戒厳令を敷いた一九七二年前後から日本の経済進出は目に見える形で明らかなものになりました。バナナも、多国籍企業が日本という市場をあてこんで作り出した商品のひとつでした。

ミンダナオ前のバナナ農園では、労働者が働いている頭上から日本で禁止されている農薬が空中散布されている。彼らは低賃金、長時間の労働を強いられている。そういった実態がしだいに明らかにされたのは八〇年代になってまもなくのことです。

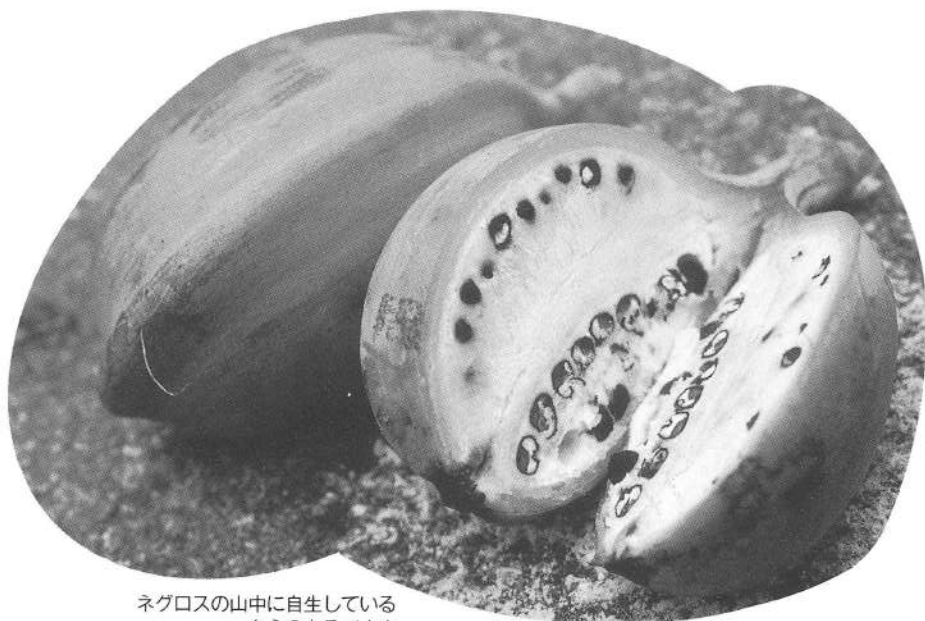
ネグロス島から無農薬のバナナが輸入されることになったとき「ここ数年バナナは食べることがなかった」「これで子どもたち安心して食べさせることができる」という声が聞かれました。このことは、バナナというものを通して日本とフィリピンの関係を具体的に考えていた人が意外に多かったことを示しています。

ところで今、ベルリンの壁が崩壊したあとの東ドイツでは安いフィリピン産のバナナが大量に出回っているといえます。世界の平和を考えると、東と西の関係が大きく変わったことは喜ぶべきことです。しかし、だからといって安いバナナを作っている南の国の人々のことを忘れて良いはずはありません。貧困や飢餓、貧富の格差といった南と北の問題は、いまだに解決されないまま残されています。そこを見つけないことなくしてこれからの世界がどうなるかを考えることはできません。

バナナを通して日本とフィリピンの関係を知った私たちは、さらに想像力を豊かにして南の人々の生活への認識を深める必要があると思います。

このブックレットを読むことで、バナナを通じてフィリピンと日本の民衆が対等な関係で作り出した草の根の経済活動がどのような意味を持つのか、さらに深く理解することが出来るでしょう。

8000年後に芽生えた 種子



ネグロスの山中に自生している
タネのあるバナナ

八〇〇〇年後に芽生えた種

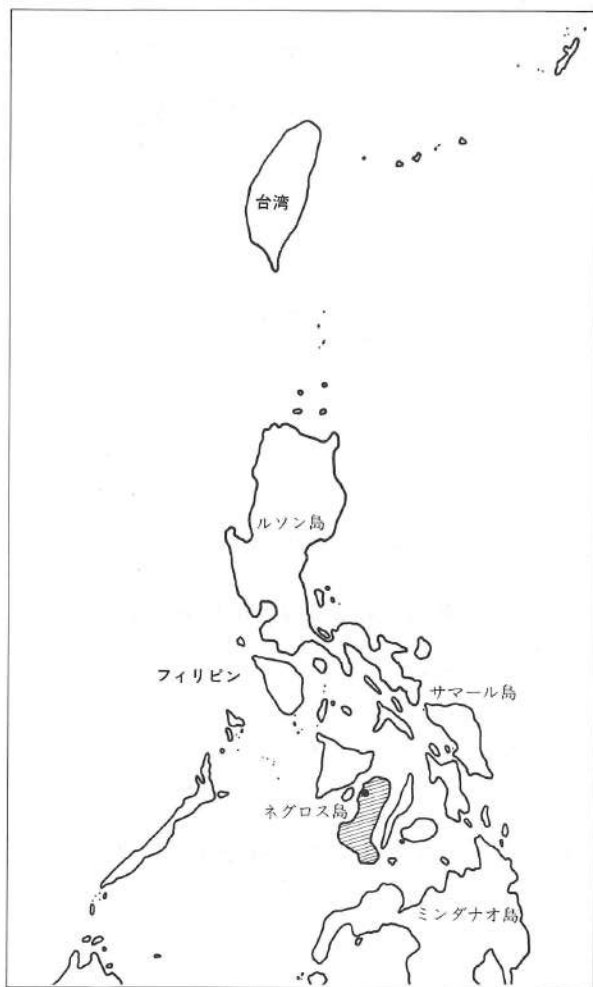
バナナの「種子」を見たことのある日本人は少ないだろう。

いま、普通に食べるバナナは、栄養たっぷりの果肉だけが詰まった「種無しバナナ」である。バナナを輪切りにすると中心に三個の茶色の点からなる星型がある。あれがバナナの種子の名残である。

種無しのバナナを作るといのは、何万本というバナナの中から、花粉がつかなくても雌しべの子房が発達して果実ができる株を発見し、それを大事に守り、引き継ぎ、育てあげたということだ。「栽培」の始まりである。それは、紀元前五〇〇〇年頃にすでに始まっていたという。バナナはもともと古い農耕作物のひとつなのである。

ところで、ネグロス島の山の中には黒い種子がびっしり詰まった、長さ一〇センチ程度の小さな砲弾型のバナナが現存している。

ネグロスバナナの出荷のために山を訪れた私は、「猿しか食わない」と皆にからかわれながら、この原生種のバナナを食べさせてもらったことがある。



噛むと口いっぱいバナナの香りと味がひ
ろがる。同時に、口いっぱい黒い大粒の種
も残る。まるで種を食べているようなもので
ある。「種無しバナナ」がいかに素晴らしい
果物であるかが実感できる。

バナナの原産地はマライ半島を中心とする
東南アジアだと考えられている。そこから世
界に広がったのだ。じつに種無しバナナを幾
世代にもわたってつくりあげた古代東南アジ
ア人の営みの素晴らしさを思わないではいら
れない。学名を「ムサ・アクミナータ」とい
うこのネグロスの砲弾型「種入りバナナ」は
そのひとつの歴史的証左なのである。



バランゴンは山の斜面に栽培されている





バランゴンのかついで山を降りる村人たち

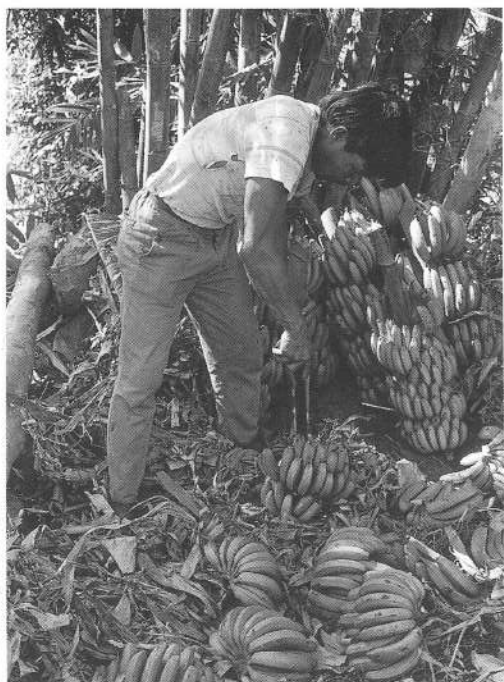
自立のための民衆貿易

バナナ原産地であるフィリピンでは、バナナはもともと手と金のかからない作物である。だれか知人から苗を買ってきて土に植えるだけでよい。九カ月後には実がなり、その時には新しい脇芽が二本芽生えている。後はネズミ算式に増え続ける。うっかりすると山全体がバナナに覆われてしまう場合もある。

オルター・トレード・ジャパン（ＡＴＪ）が、草の根産直としてネグロス島の民衆から輸入しているバナナ（バランゴン種）は、貧しい開拓農民や砂糖キビ労働者たちが、地主の目の届かない土地や、自分たちが焼き畑農業で切り開いてきた山の斜面等に植えているバナナである。

いま、ＡＴＪと九州の生協連合グリーン・コープを中心とする「バナナの草の根貿易」の実践では、これまでの仲買人の買値の三倍から五倍の値を生産者に支払っている。

この価格は、実際のネグロス島のバナナの小売価格から運賃と現地の民衆貿易団体の最小の利益とを差し引いた価格である。いわば流通合理化による産直価格を生産者に還元したものである。



バナナの集積所で車の来るのを待つ



1本1本丁寧に洗われるバランゴン



積み出しはワイエスタ

毎月、バナナの日本への出荷の日になるとバナナ産地全体が燃え上がるように活気にあふれる。生産者は、二時間の山道を天秤棒にかついたり、水牛の引くソリに載せたりして自慢のバナナを集荷場所に運びだす。集荷場所ではBCC（キリスト教基礎共同体）の地域の役員が品質チェックをし、合格したものの本数を数え、その場で現金を渡す。

オルター・トレード社のトラックが時間に合わせて集荷に来る。バナナは教会の庭に作られた「パッキング工場」と呼ばれる竹で作られたたさやかな作業場に持ち込まれる。各地域からBCCの母親グループが組織した作業班が五〇人ずつ、八時間交代制で、バナナの選別、水洗い、箱詰めを行う。母親たちには時間給が支払われる。箱詰めされたバナナはバコロド市に運ばれ飛行機に積みまれて、マニラで冷蔵され、輸出される。

BCCという、教会を中心とする民衆団体がこのバナナの産直に直接携わるようになって地域全体に大きな活気がみなぎるようになった。この地域だけでもBCCのメンバーは一万五〇〇〇人はいる。この人びとにとって



ジクを丁寧にカットする。顔つきは真剣だ

バナナの輸出は、彼らをはじめて経験する彼ら自身の経済的事業活動なのである。彼らにとって自主運営の経験はフィエスタ（祭）の運営の経験しかない。そつた意味では、バナナ輸出は毎月フィエスタがあるような、うれしい興奮する作業なのだ。

遠い山の上からハオと一〇オの少年たちが父親の後について、細い肩に四〇キロ近いバナナを天秤棒に振り分けて運んでくる。四〇分の道のりである。急な斜面をこの重い荷物を担って走り下りる。やっと荷を下ろした少年たちはフーッ荒い息を吐き、こめかみに汗を浮かべ、上気した顔でしばし呆然と立ちつくす。彼らの貧弱な体格のどこにこれだけの力があるのか。ただ、彼らの足裏だけは幅広く剛直な裸足なのである。小型の砲弾型種入りバナナ「ムサ・アクミナータ」を思わせるではないか。

この人びとにとってバナナは元手いらずの換金作物であり、一年を通して着実な収穫の上がる作物である。もし、彼らが日本への輸出作業の経験を通して、仲買人や旧来の地元流通資本の支配を断ち切る自主流通事業を確立できれば、この少年たちも、小学校を卒業できるよつになるかも知れない。母親たちは



箱詰めまで作業は夜とおし続けられる

マニラ行きコンテナに積み込まれるバラゴン



年に一度は新品のシャツを買ってやれるようになるかもしれない。

八〇〇年の時間を経て、新しいバナナの種子がもたらされたと考えたい。民衆の事業はまだ始まったばかりである。しかし、種有バナナを種無しバナナに育てあげた古代人の悠久の時間を思えば、われわれにやつてできないことはないだろう。

そう、バナナの種子が見たければネグロス島に来ればよい。

(文・堀田正彦／写真・長倉徳生、バナナ申し込み先は、オルタトレッド・ジャパン 新宿区西早稲田二一ー一〇三ー五二七三ー八一六三)

『世界から』第37号より転載

台所からアジアを見よう バナナ

C O N T E N T S

*本文用紙は再生紙を使用しています

8000年後に芽生えた種子

自立のための民衆貿易

積み出しはフィエスタ

3

私たちの暮らしがアブナイ

「エビ・オベラ」現象

「マネーモンスター」日本経済の出現

シナリオが描く私たちの近未来

インスタント麺が語る戦後「食生活史」

豊かさを実現する「生産―流通―消費」

「共生」の生産と流通をどう創造するか

バナナを通して世界を見る

古沢広祐

12

良いバナナと悪いバナナ

緑豊かなネグロス島でなにが起きたか

民衆の自立への希求高まる

日本の消費者とネグロスの出会い

大地と働くものとの亀裂

自給自立の農業へ

バナナ作戦はこうして始まった

ネグロス島内の産直サービスが始動

「マスコバド糖」が初めて神戸に上陸

ネグロスの人々を訪ねて

だれのための「命・暮らし・自然」か

体に良いのをおいしいバナナ

バナナ輸入にチャレンジ

失敗してもめげずにやり抜く

品質チェックも怠りなく

民衆経済を発展させよう

台所をアジアに解放していくには

堀田正彦

30

私たちの暮らしがアブナイ

アジアの中の日本・人々の手でつなぎあう生活を求めて

目白学園女子短期大学講師

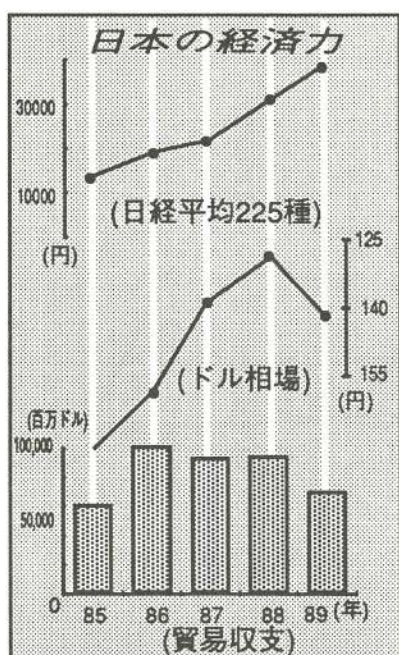
古沢広祐

「エビ・オペラ」現象

私たちの日本社会は、いま歴史上かつてない経済繁栄の時を迎えているかにみえる。とくに八〇年代に入ってここ数年間に起きた出来事は、私たちの予想をはるかに越えたものと言えるだろう。例えばその筆頭にあげられるものに「エビ・オペラ」現象がある。ご承知のように、グルメブームが続くなか、八六年度からエビが食料品輸入金額のトップの座におどり出るとともに急上昇を続けており、その額は八八年度で三六五〇億円、一日に一〇億円ずつのエビを輸入し続けたことになる。これはもちろん世界最大であり、世界貿易量の三分

の一近い量を日本一国が輸入している勘定になる。この年には、フランスと米国にしかなかったキャビア専門レストランが相次いで東京の原宿と青山にオープンしている。同じ八八年、世界の三大歌劇場の来日公演が次々に実現し、一枚三万円ものチケットが売り切れた。このところの消費ブームは異常なほどで、高級品は行き着くところまで行くといった感があり、例えば一足が百万円という超高級ソックスがお目見えするといった具合だ。八〇年代後半の「豊かさ」のまっただなかにある日本、それを象徴するのが「エビ・オペラ」現象というわけである。

しかしこうした消費ブームも、ふつうの生活者



としての庶民の立場に立つならば、雲の上の出来事のように見えるのが実感ではなからうか。たとえば勤労者の労働時間は先進諸国のなかでも際立って長い（年間で仏、西独より二ヶ月強も長い）。欧米から見れば信じられないような残業労働に精を出している日本人だが、「仕事での悩みやストレス」の訴えは五年前より一割近くも増えており、健康上なんらかの自覚症状があると答えた人は八三％に達している。それは最近では「過労死」問題として社会的にも注目され出している。

また広く私たちの生活をめぐる状況を見た場合、さまざまなところで格差の拡大が生じる気配を見せている。その背景には、最近の円高現象とほぼ

並行して現れてきた地価と株価の高騰がある。結果的には、ばく大なる資産価値を生じさせるとともに、持てるものと持たざるものとの格差を大きく引き離してしまった。それはまた、社会全体としては少数の巨大企業がばく大なる資産（株式、土地、他）を抱え込んでいる事実にも象徴されている。

実感するしないは別として、「富める企業大国」日本に対してふつうの人々の「生活や労働の質」の相対的な貧しさは、如何ともしがたい状況にあるというのが実態ではなからうか。

このように内部的に矛盾が膨らみつつあるなかで、外の世界との関係にも様々な矛盾が顕在化しだしている。それは黒字拡大による貿易不均衡・摩擦問題にとどまるものではない。金持ち大国としての位置が世界経済の中で浮上するにしたがって、周辺のアジア諸国から食糧の輸入ばかりか、いわゆる外国人労働者の大量流入現象が起き始めているのである。

「マネーモンスター」日本経済の出現

外の世界からみるかぎり、日本は巨大なるマネー

大國として浮上しているわけだが、それは煎じつめれば自動車産業を筆頭とする特定の工業部門のきわだった成長と、その集中豪雨の輸出が世界市場を席巻したことに端を発している。それらはまたたくまに多額の貿易黒字を生み、急速な円高現象を生じさせる引き金になった。八六年度の貿易黒字総額のうち約六割は輸出額上位三〇社によるものであり、約五割は上位一〇品目で占められていたのである（八七年度版、通商白書）。巨額を占める対米国輸出黒字の三割強は自動車とその部品である。大幅な貿易黒字が大きな要因となつて、ここ数年のうちに倍近い円高現象を生んだわけで、八五年頃の一ドル＝二五〇円、二六〇円前後のレートから、八七年末で一二〇円近くまで急騰し、このところ多少緩和して推移している。

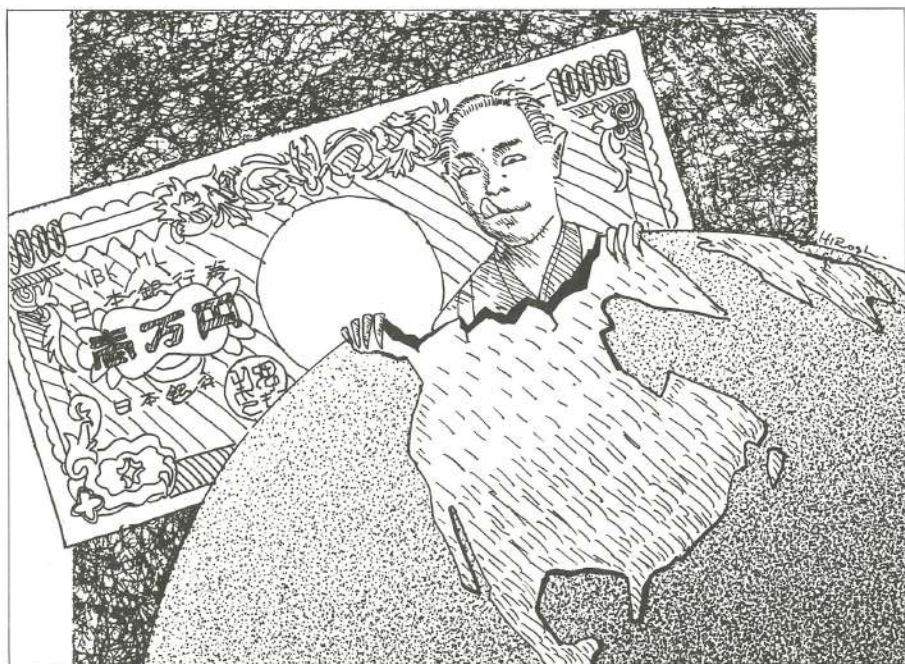
つまり海外から見れば、日本の物価、あるいはサラリーマンの給料も、すべて約倍近くの価値になっているわけだ。逆に国内から見れば、海外の物価とくにドルベースのものは約半額のバーゲンセールになつてしまつたのである。このことは、国の中を見ているかぎりにはさしたる変化はないかのようだが、一たび国際経済とのつながりで見ると、大変動が起きたことを物語っている。

すなわち日本経済は、八五年度には世界一の債

権国（金貸し）として浮上、八七年度には総資産額でついに大國アメリカを抜き（五三三八兆円）、名実ともに経済とくに金融面におけるマネー超大國としての位置を確立したのである。その金融超大國としての姿は、世界のトップ銀行の上位七社をすべて日本の銀行が占めていることだけをみてもうかがいしれる。

しかしながら、その中身は過半が地価や株価や含み資産増であることに注意しておく必要がある。実際に総資産のうちの半分以上（五三％）は、株式、債権そして預貯金の金融資産が占め、さらに三分の一（三三％）は土地資産であつて、狭義の実物資産（住宅、社会資本、企業設備等）は一割強（一四％）の七五兆円にすぎない。つまり巨額の資産価値を持つといつても、それは主として株と土地資産の水ぶくれの膨張が最大の原因なのである。

実際、八六年度のGNP（国民総生産）が三三兆円だったのに対し、同年の地価と物価の一年間の値上がり分だけでその額を越えて三七〇兆円、さらに八七年度GNP三四兆円に対して両者の同年度値上がり分は四八〇兆円となっていることをみてわかる。私たち国民全体が汗して働いて生み出す額をはるかに上回るお金が、ただ忽然と



わき出てくるというようなまさに信じられない現象が起きているのである。

それはまさしくマネーモンスター（怪物）ともよびたくなるような様相を示しており、そのマネーは、私たちの日々のくらしの頭上を越えて世界中を駆け巡っている。いまや大々的な資本輸出（投資）が始まっているのだ。日本の大手生命保険会社や不動産会社は、世界の主要都市、ニューヨークやロサンゼルスなどの中心街のビルやホテル等を次々に買収しているし、最近のロックフェラービルやコロンビア映画の買収劇はその象徴的出来事といえるだろう。

諸外国の不動産の買い占めや企業買収、海外進出・開発投資などの現象が、爆発的ともいえるほどの勢いで進展している。少なくともお金というものが、年々利子を膨らませていくように、投資された金はより以上の金を生んでいくことが期待されていく。世界一の水ぶくれ資産は、金が金をよぶマネーの世界的循環のなかで、新たな投資先を求めて巨大なマネーパワーの力を発揮し始めようとしている。それは、かつて英国が百年を越える年月を費やし、そして米国が半世紀以上をかけて築き上げた世界経済を支配する道を、数十年という短期間のうちに駆け上がっている姿としてみ

れるほどである。

今後、急速に進むのは、国という殻から出て飛翔するいわゆる世界（多国籍）企業のグローバルな展開である。それは例えば農業・食糧問題からみれば、アジア各地ならびに世界各地を食糧基地化していく道筋であり、より広く産業一般からいえば、世界各地のより安い資源、労働力を効率的に使うための再編成、世界的分業の深化と国境を越えた企業の統合が日本を一つの中心軸として進んでいくことにほかならない。

シナリオが描く私たちの近未来

世界経済はマネー大国化する日本の一方で、途上国のサラ金地獄のような累積債務（借金）の拡大を生み、同じくアメリカの財政と貿易の双子の赤字を膨張させながら、自由貿易を錦の御旗に掲げて、無理を承知でバランスをとろうとしているかにみえる。そこで生み出される富は人々の幸せとは無関係に、矛盾をより深化させていくようにみえてならない。そうしたマネーゲームの帰結が、例えば八七年十月にニューヨークのウォール街を襲った株の大暴落（暗黒の月曜日）であったとい

えるだろう。わずか一日で一兆ドル（日本のGNPの約三分の一）に近い含み資産が消し飛んだのだ。最近の経済の動向について、私たちの想像を越えた事態を生むに至った背景には、今日の社会・経済システム自体がはらむ根本的矛盾があることを深く認識する必要があると思われる。わたしたちがいま、いちばん考えねばならないのは、激動する社会の状況変化にただのみ込まれ、流されていくのではない足場をどう築けるかということではないだろうか。

経済効率や自由競争が唯一の価値基準になりはじめた時代状況のなかで、生活とくに食や農業にいまどういった展望が描き出せるのか。ここでは、既存の枠組みにとらわれない自由な発想のもとで、二十一世紀はもとより、子や孫の代まで視野に入れた私たちの生活をとくに食や農業の視点から、ひいては社会そのもののありかたについてまで検討してみたい。結論を先取りするならば、おおまかに三つのシナリオが描けると思われる。

まず第一のシナリオは、農業の規模拡大や安い輸入食糧による徹底的なコストの引き下げによって、よりいっそうの経済合理性を追求して行く方向である。

第二のシナリオは、最近のグルメブームや食の

ファッション化、手作り、本物、安全志向などを念頭においた新たな商品価値（高付加価値、差別化）の実現をめざす方向である。

そして第三のシナリオは、農や食には経済合理性や商品経済性を越える深い価値実現の世界があることを認識し、いわば共生または共同の多様な価値を探る方向である。

おそらく三つのシナリオは、現実には相互にお互いの要素を含みながらそれぞれに展開し得るものである。ただし現在、ふつうに言われていることは、ほとんどが前二者についてのみである。

政府の農業白書（八七年度）で謳われたのも、スケールメリットと効率的な経営管理による低コスト型農業の実現であり、健康・安全性・本物志向に対応した収益性の高い高付加価値型農業の追及であった。従来の経済的観念や他の様々な商品がたどった道を見るかぎり、シナリオは前二者に集約される。しかし、ここでいちばん強調したいのは第三のシナリオの存在である。それは経済効率（競争）と国際分業（自由貿易）の原理が世界のすみずみにまで広がり、農業をも巻き込んでいる現状に対して、原理的に別の可能性を求めることを意味する。

少し大袈裟に言えば、生き延びるためにはてし

ない競争の世界にはいつていく奈落の道から、なんとかして別の脱出口を探り出せないかということである。

インスタント麺が語る戦後「食品史」

本論に入るに当たり、ここでわたしたちの食生活が戦後どのように様変わりしてきたかをおおまかにみておきたい。そのための具体的事例として、インスタントラーメンはきわめて象徴的な存在である。年間の国内出荷量は四六億二千三百万食（八八年三月）。赤ちゃんをふくめて国民一人当たり年間三十八・五食を消費している食品である。

大阪で食品加工販売会社を営んでいた安藤百福氏（現日清食品会長）が自宅裏の小屋で製麺機を持ち込み、苦心の末に完成させたのがインスタントラーメンの出生である（一九五八年夏発売）。お湯をかけて二分で出来上がりというこの「チキンラーメン」は、発売当初はあまり注目されなかったが、テレビによる大々的な宣伝が候を奏し、一躍、脚光を浴びることになる。

インスタントラーメンは、六〇年ころから急伸びますが、この食品のもつ新奇性、簡便性、大衆



性（主食性）が、人々にアピールしたものと思われる。なかでもその簡便性が最大の売り物だった。当時、経済の高度成長期を迎え、活気あふれる社会状況の中で「より早く」は人々の願望に近いものになっていた。まさにそういった時代状況を受けて、このインスタント食品は両手を上げて迎えられたといつてよいであろう。

六三年頃から、一時、生産量の伸びが緩む時期を迎える。それを契機に、インスタント食品の宿命とも言える味の画一化に対して、消費者を引き付けるために新奇性の創出、多様化が求められて行く。和風麺、即席焼きそば、ワンタン麺の登場、中華から洋風への動きとしてカレーラーメンなどが現れる。くどい醬油味から淡泊な塩味へとということから、タンメンブームが起きた。さらにみそラーメンも登場した。

七〇年代に入るところから、大きく二つの分岐が始まる。その一方がスナック麺「カップヌードル」の誕生である。容器、調理器、食品の三機能を備えたポリスチレン製のカップ容器、油揚げ麺と粉末スープと凍結乾燥によるカヤク（具）という構成で、一躍インスタント食品の筆頭に踊り出た。スナック麺にその簡便性のお株を奪われた従来からの袋ものは、以降、そのシェアを奪われて行く。

そうしたなか、袋ものの新たな展開がもう一方で始まる。七二年を境として生産量が頭打ちになるなか、その小売価格が上方へと転じる。スナック麺を筆頭とするさらなる簡便化の方向に対して、高級化志向により生産量の落ち込みを価格でカバーする方向がめざされたのだ。従来の油揚げ方式から熱風乾燥方式への移行とともに、高品質と生麺の味を売り物にする新商品が登場し、シェアを延ばして行く。

以降、袋ものを中心に高品質・本物志向がよりはっきりと現れていくが、たとえばつけ麺ブームが起きたり、カヤク（具）の多様化、地域性を強く打ち出す商品の開発なども進んだりしていく。そして八十年代に入ると、一袋五百円あるいは千円という超高級ラーメンが出現し、それが一種のブームを呼ぶと言った状況が生じてくる。

こうした高級ラーメンの登場の背景には、フリーズドライ方式（凍結乾燥）の製法の開発がある（七七年）。この方式では、熱湯を加えると茹で上がりそのままの状態に復元出来る。工程には時間もかかり、多大なエネルギー消費を必要とするため、必然的に価格高にならざるを得ない。

そこで、商業ベースに乗せるため、「幻想的イメー」でもって、アピールする商法が駆使された。そ

のネーミングといい、中国ロケまでするCMづくりといい、来るところまで来たという感が強い。登場以来三十年近い歳月を経て、ばく大なエネルギーと費用をかけて「手作りの味」や「本物の味」を人工的に演出する、まさにパラドックス的現象を生じるに至ったわけである。

そこには戦後の「食」の変貌ぶりが集約されて現れている。移ろいやすい消費者の心を引き付けるための多様化、高級化、ファッション化。はては「本物」を幻想性を加味させてイメージづける演出が仕組まれているのである。先に述べた三つのシナリオのうち第二の方向が、そこにはきわめてリアルに映し出されている。

こうした動きは現にいま、全国各地で始まっているリゾート開発などにおいても、同じような傾向を見せている。しかし、この第二のシナリオが、はたして人間社会の将来像として望ましい方向であるかと言えば、疑問視せざるを得ない。

多少皮肉を込めていえば、その背後にある心理として、これみよがしに豪邸を構えたり、高級ブランド品を身につけたりする人間の姿を彷彿させる。極論を言えば、現代人や現代社会がはらむ精神的未熟や心の貧しさが、そこに現れていはいはしないだろうか。

高度大衆消費社会を、人間性の豊かさという視点から、ここで根本的に問い直して試みる必要があると思われる。

豊かさを實現する「生産—流通—消費」

日本人全体の意識として「物の豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する人々が多くなるのは、一九七八年頃を境にしてであった（総理府・世論調査）。その後、一貫して「心の豊かさ」への重視は続いている。また最近の世論調査で、農業・農村の食糧供給への期待に対して、「農薬の使用量を減らすなど安全な食糧を供給すること」がトップを占め（四八・一％）、「生産コストを引き下げ、より易い食糧を供給すること」（三九・四％）を上回った（八七年九月、「食生活・農村の役割に関する世論調査」総理府）。

最近、有機農業が広く注目され始めていることも、右の世論調査の結果との強い関連性をうかがわせる。

有機農業は七〇年代初頭、自然の生態系を無視して化学肥料や農薬一辺倒に頼り切る農業への対

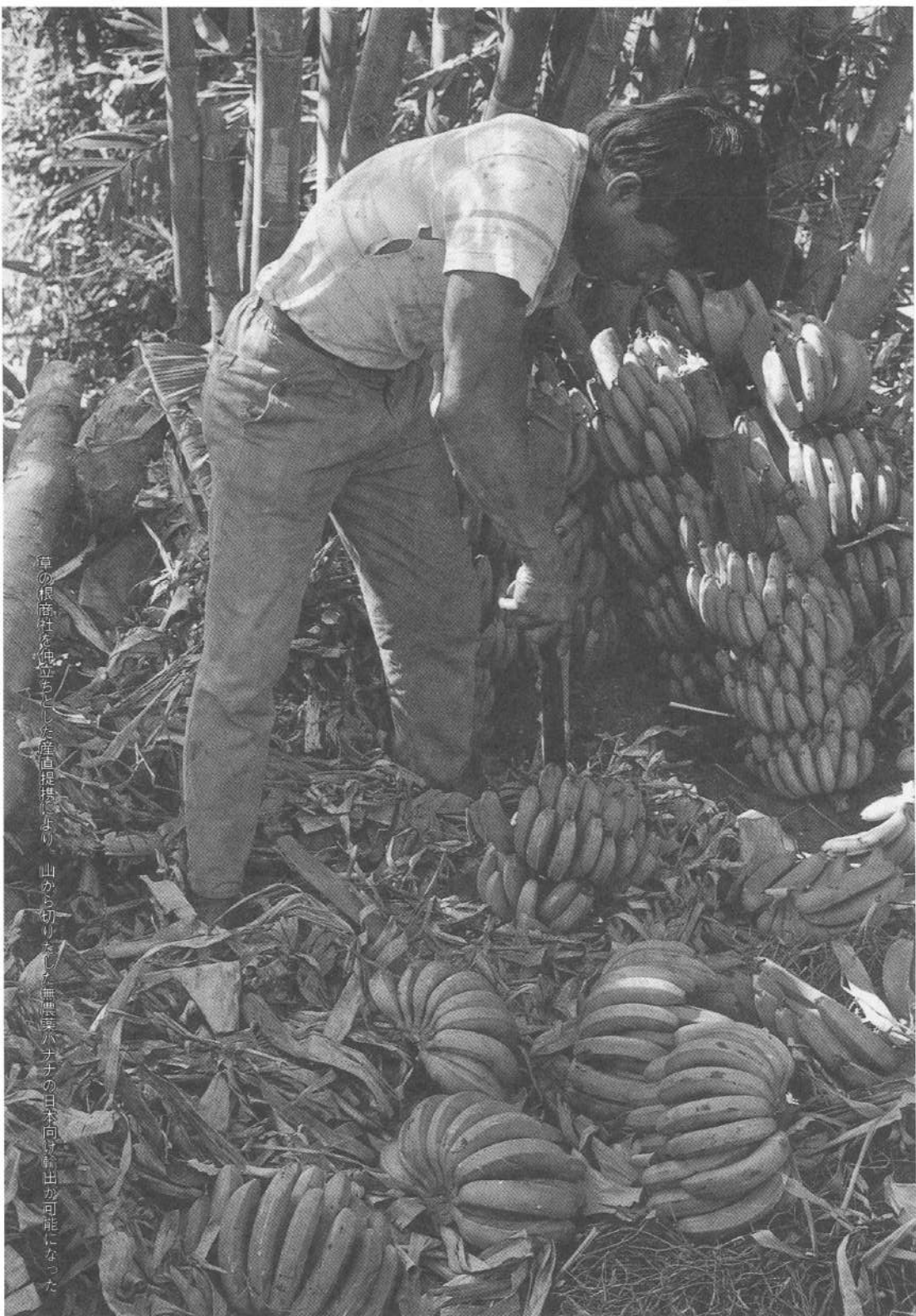
抗として、生産者と消費者との提携、いわゆる産直・共同購入運動を軸にスタートした。それは単に「安全でいいもの」の入手という枠を越えて、生産の現場と結び付き、その苦勞と喜びを分かち合い、生産の豊かな意味内容を取り戻そうという問題意識を強くもっていた。

労力や手間がかかる分だけ多少高めに取引されたことから、安全性を価格で支払う関係としてだけみる評価がなされたが、それでは大切な視点が抜け落ちている。そこに経済性を越える価値の実現がなされていることに注目する必要がある。それは農家と消費者共々に起きている。

全国の有機農業農家を対象にしたアンケート調査（有効回答百三十四、回収率三九％。一九八二年）では、つぎのような傾向が読み取れた。

農業に対する考え方の変化として、おもしろくなった（六九％）、変らない（一六％）、つまらなくなった（一％）、その他（五％）、無回答（九％）。食糧の自給の増加として、野菜（三六％）、農産加工品（二一％）、肉・卵（一七％）、果物（二〇％）、米（七％）。

家族の健康の変化として、健康になった（七〇％）、以前と同じ（二一％）、健康でなくなった（一％）。



蕉の根腐れを防止とした唐直提換により、山から切り出しが無難なオナナの日本向け輸出が可能になった

家計費の変化として、食費が減った(五六%)、医療費が減った(四四%)、変わらない(一九%)、増加した(一・五%)。

ある程度の目安でしかないが、生活内容にかなりの変化が出ていることがわかる。興味深いことは、共同購入をしている消費者団体の会員アンケート調査でも、似たような結果が得られたことである(有効回答四百五十八、回収率四二%、一九八一年、京都「使い捨て時代を考える会」)。

農産物の供給を受けるようになって、「生活が変化した」と感じている人が七九%いる。その多くが「食生活が変わった」(七二%)とし、中身では、「せっけんの使用」(五四%)、「社会の仕組みや問題に関心」(四三%)、「ものをたいせつに使い捨てない」(四二%)、「廃食油の回収(せっけんの原料)」(二六%)、「子供の育て方に変化」(二〇%)などをあげている。

家計費の変化について、約四割の人が楽になったと回答し、その理由として「不必要なものを買わない」(二九%)、「外で買物しない」(一九%)、「たいせつに長持ちさせる」(一五%)、さらに「医者や薬の世話にならなくなった」(九%)などをあげている。そこには、従来の商品経済では考えられないような価値の相互実現がなされている。

る点に注意したい。

まず有機農業の実施者が、農作業に対する労働の意味を取り戻す、いわゆるやりがいを見いだすなかで、生活総体を充実した内容に変えている点に興味深い。それは商品をたくさん効率よく生産したり、付加価値の高いものを生産することによって、充実感を越える世界を実現しているように見える。とくに消費する人々の顔が具体的に思い浮かべられることで、生産し労働する意味は単なる商品生産以上の意味をもつように見える。

消費者のほうも、交流会や援農を含めて生産者との緊密なつながりをもつことで、消費する一品一品が単なる商品以上の価値を帯び始め、農場の様子や農家の苦労、さらに天候を含め、自然の恵みをも感じ取れる豊かな感性を育んでいっているように思われる。前述のアンケート事例の団体の会員が「子供らと生産者をたずねたときのことなどに話がはずみ、食卓が豊かになった」「野菜を分けながら畑の話、農家のことなど、だれがどのような思いでつくってくださったかがわかる食べ物を口にする安心感は、いまでも重要なものですよ」などといった事柄を語っていることに注目したい。

こうした新しい流通は、ボランティア型から共

同出資による流通センター作りまで様々な類型があり、また従来の農協や生協が新たに作り組むなど多彩な展開を見せている。そこでは洗浄や規格分けといったむだな手間を省き、危険な薬品処理やよい包装・荷造りの必要もなくなり、従来は規格はずれだったものまでむだなく利用でき、余分なマージンも省かれて、別の意味での経済合理性が実現されているのである。

さらに生活様式の変化、洋風化から風土と自然に即した食生活メニュー、保育や教育の在り方や、健康管理やレジャーに至るまでの意識の変化が生まれもする。消費の面でも、個別の農産物価格が多少高めでも結果的に食費総体としては安くついたり、生活費支出が全体として抑えられるといった興味深い副次的効果を生じているのである。

ここでいちばん強調したい点は、生産―流通―消費のそれぞれの場面で、個別・一般的な経済評価ではとらえきれないような多面的で豊かな価値が実現される可能性が開かれているということである。

それは作物や家畜が生命としての独自性とその能力を十分に発揮しながら、周囲の生態系ともバランスと緊密な関係を形成しつつ、さまざまな副次効果や循環サイクルを作り出す有機農業によっ

て実現されている。自然に対して、あるいは人と人との関係に対しても、豊かな関係性を生み出す、それが有機農業の本来の在り方といったらいだらうか。

それは生産システムを単一目的に限定し、人間の都合のみを押し付け、経済効率だけを、無理（抑圧）や無駄を重ねて極大化させる従来の方向とは正反対の可能性を示唆している。システムを内にも外にも安定させ、多様な関係をつくりだしながら、個別でなく生産力を総体として質的に豊かなものにし、多面的な効用を生み出して行く可能性を開いているのである。それは生命という存在が元来もっている本質的なものの開花といっているかもしれない。

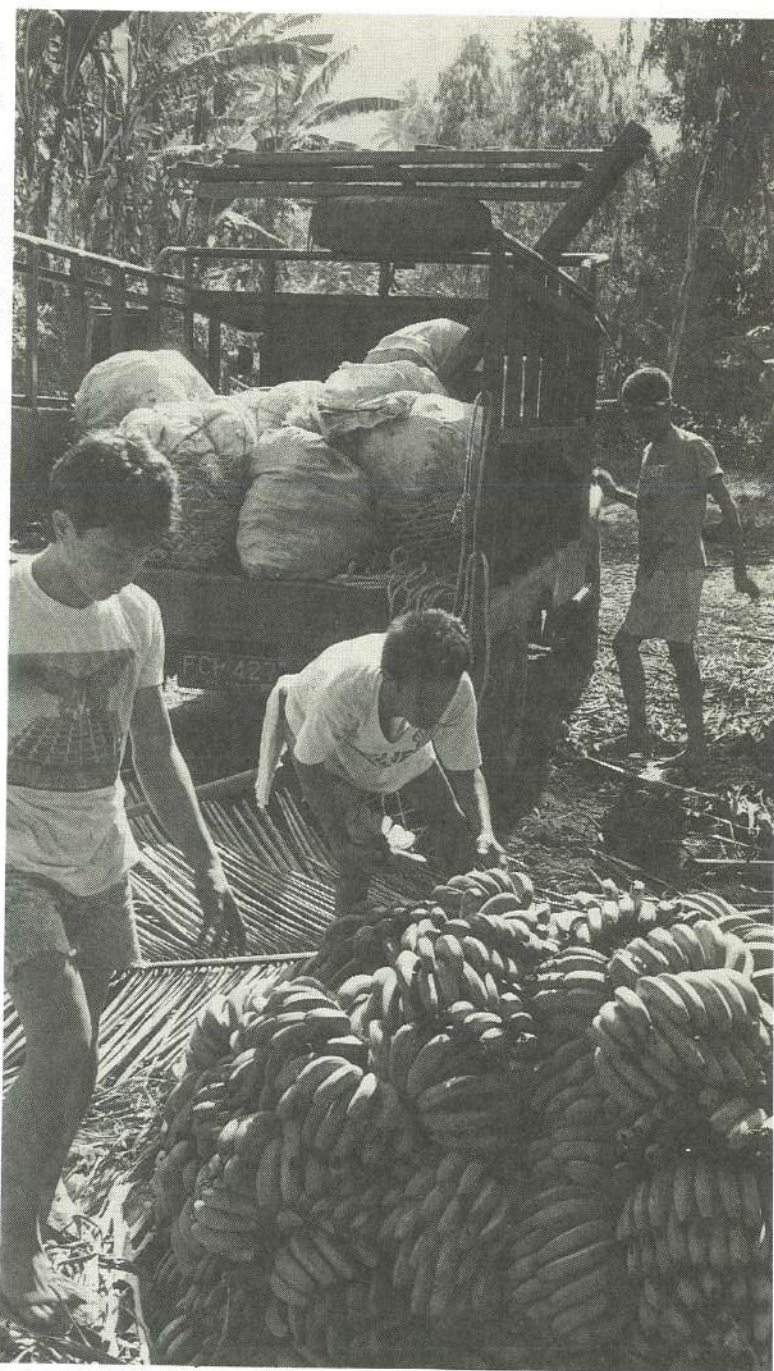
そこに自己と世界を自覚する原点があるのではないだろうか。あらゆるものが経済合理性や貨幣価値のもとに編成されている世界に対して、人間の真の豊かさを復権する鍵がそこにありはしないか。もしかすると、さらにそこから工業化、産業化のつぎなるイメージ、もうひとつの情報化社会のリアルな像を、私たち自身の手で描き出せるかもしれない。

情報や関係の創造行為に金銭的価値以上の意味

集められたバナナを自前の中古トラックに積みこむ。輸送手段の確保で独自の流通の道が拓けた

を見いだす傾向こそ、情報化社会の到来を予告するものである。わたしたちはすでに必要以上にモノをつくりすぎ、それに翻弄されすぎている。新奇性やモデルチェンジを追いつめる“飢えたる心”や“誇示する精神”を前提とした情報化社会では先行きは暗い。世界中から食材料を集めた高級レ

ストランの会食より、手作り野菜による持ち寄りのパーティーのほうが心落ち着いた豊かな世界ではないのか。高くて格好だけのDCブランドで着飾るより、自分でリフォームしたり、気持ちを通じ合う人による手作りの作品を身につけるほうがよりリッチではないか。



情報や関係を市場メカニズムのもとで、付加価値をつけ、商品として差別化していく世界に抗して、わたしたち自身の、自覚的ライフスタイルの創造こそが、いまほど求められているときはない。

そして、生命という存在や、自然との関係性、人と人との関係を、内容豊かなものに創造する「生産―流通―消費」のあり方が、競争社会を越えた「共生社会」の基礎をつくりだしていくのである。

「共生」の生産と流通をどう創造するか

共生とは、生き・生かされる多様な関係をあらゆる場で発見・創造していくことである。それは、人と自然、人と人、人と社会の関係でも、また都市と農村や農・工・商、あるいは国と国との関係においても、おのおのの独自性を尊重しつつ、対等かつ自由な関係を基本に、相互に豊かな世界をつくりだすことである。

共生関係を結ぶための基本的なルールとしては、つぎのことに留意することがたいせつである。

○ 人に対して、自然に対して、社会に対して、正直、謙虚、誠実であること。

○ 相手に一方的に多くを期待し強制するので

はなく、おのずと生み出されてくる力を感じとり、相互啓発のなかで関係が芽生え成長することを期待する。

○ 生産―流通―消費のどの場面でも、支配・被支配・管理・強制を極力廃して、自発性や自立性に基づく対等な立場からの協同（もたれあいではない）を発揮するとき、予想以上のトータルな効果がもたらされる。

共生の社会関係では、モノや関係の価値を狭い尺度で固定的に測るのではなく、未知なる価値を発見し、創造するという、主体的で創造的で共同的な行爲が大きな意味をもつ。極論を言えば、存在そのものに価値があるのであり、価値の源泉（世界）との出会いを感じとる豊かな感性こそが多様な価値を生む（それは芸術や職人の経験的世界とも相通する。）

情報化社会への移行とともに、モノの価値にプラスして情報や関係性の価値が大きな相乗効果を発揮する。その世界は、まさしく発見と創造の世界そのものである。それは貨幣価値を越えた世界であり、タダにもなれば万にも億にもなりうる虚構性をもつ。そこで留意すべきはカネの世界に感わされない足場（自立性）を、広い意味の公共性・

協同性・社会性の自覚のなかで自他とともに築き上げる必要があるだろう。

バナナを通して世界を見る

最後に、無農薬バナナを通して共生の世界を国境を越えて実現しようとする試みについて一言ふれてしめくりにしよう。冒頭で述べたように、今日の日本の人々は、地球規模で展開するマネーとモノの循環の中で豊かさを享受している。その意味ではネグロスの無農薬バナナは、その出発点として、気が遠くなるような南北間の格差、豊かさと言しさの越え難いギャップへのかけ橋を民衆の手で作ら出そうとする試みなのである。

だが現実の商品社会と経済を前提とするかぎり、ネグロスのバナナでさえも時がたつにつれ単なるブランド商品の一つに組み入れられかねない危うさをもつ。つまるところこのバナナを、壮大なる社会実験・実践にしようか否かは、私たちの主体性にかかっているといえよう。バナナ一本をたんなる「おやつ」のひとつにとどめるか、バナナを通して、私たち自身の生活や暮らしの在り様を問う契機（私たちの生活資材や資源の大半は、南の

貧しい国々の人々の暮らしを下敷きにしてなりたっている）にしようか、どちらにむかうかでそれは決まる。

おそらく他の共同購入運動でも同じことだが、世界の矛盾に目を開く契機にするといっても、やみくもに理念を押し付けたり、かくあらねばならない式の運動論を前面に掲げるのでは人々はついて来ないだろう。ほんのささいな発見や驚きを共有し育てあうような、共感や探求の精神こそが大切である。その意味では、バナナを素材にした遊びや劇、クイズやゲーム、教材づくり、あるいは様々な運動などを並行してどんどん進めていただきたい。バナナと遊び、バナナを通して世界と出会う、すばらしい可能性がそこから引き出されることだろう。

また基本的には従来の商業貿易に対抗するオルター・トレードの基本的理念や組織論、運動論を今後ともより深めて行く必要があると思われる。国内のさまざまな産消提携（産直）運動でもまだまだ多くの困難な課題や挫折の経験をつみかさねている所が少なくない。まして国境を越え文化や風習、社会や制度など幾多の壁を乗り越えなければならぬオルター・トレードの前進は、けっして平坦な道ではない。そのことを確認したうえで、今

後の展開に向けての留意すべき基本的項目を箇条書にしておこう。

○ 顔と暮らしが見え、お互いを思いあえる関係が作り出せること。モノの流通と同時に心や情報の流れ、さらに人と人との平等な交流が育まれること。

○ 生産の過程、流通、消費の全過程について、お互いに理解を深めあうとともに、今日の世界的・経済的格差について考える素材とする。そのためには、原価とコストの公開、適正かつ公正な価格の追及が前提となる。また他の一般商品についても比較の意味を含めて同様の分析作業を進める必要がある。

○ モノの交流にとどまらない新たな課題へのとりくみとして、積み立て等の形で「オルタナティブ基金」などを設け、自立的発展を促す活動を支援する。

最後のしめくりにかえて、多少長くなるが次の文章を引用しておきたい。いま私たちが担うべき課題、求められている事柄が、そこに象徴的にそして新鮮な目で語られていると思うからである。

コペル君は中学二年生です。

本当の名は本田潤一、コペル君というのはあだ

名です。年は十五ですが、十五にしては小さいほうで、実はコペル君も、それをかなり気にしています。(中略)

めずらしい出来事が起こりました。叔父さんのところへ、コペル君から長い手紙がとどいたので、

それは、次のような手紙でした。

叔父さん。

こんど叔父さんに会ったとき、話そうと思っていたことなんです、手紙に書いた方がいとおもったので、この手紙を書きます。

僕は一つの発見をしました。(中略)

月曜の晩に、僕は夜中に目がさめました。なにか夢を見て目がさめたのですけど、なんの夢だったか忘れしました。目がさめたら、どうしたんだか、僕は粉ミルクのかんのことを考えていました。うちで、おせんべいやビスケットをいれておく、あのラクトーゲンの大きなかんです。そうしたら、お母さんのいったことを思い出しました。僕が赤ん坊のとき、お母さんの乳がたりなかったもので、僕は、毎日ラクトーゲンを飲んで育ったのだと、いつかお母さんはいいました。今のラクトーゲンのかんは、その時の記念だそうです。僕は、その話

を聞いたとき、じゃあ、オーストラリアの牛も僕のお母さんかな、と思いました。だって、ラクトージェンはオーストラリアで出来ていて、かんにも、オーストラリアの地図がかいてあるからです。僕はそのことを床の中で思い出しました。そしてオーストラリアのことを、いろいろ想像しました。(中略)

僕は寝床の中で、オーストラリアの牛から、僕の口に粉ミルクがはいるまでのことを、順々に思っていました。そうしたら、まるできりがありませんで、あきれてしまいました。とてもたくさん人間が出てくるんです。ために書いて見ます。

(一) 粉ミルクが日本に来るまで。

牛、牛の世話をする人、乳をしぼる人、それを工場に運ぶ人、工場で粉ミルクにする人、かんにつめる人、かんを荷造りする人、それをトラックかなんかで鉄道にはこぶ人、汽車に積みこむ人、汽車を動かす人、汽車から港へ運ぶ人、汽船に積みこむ人、汽船を動かす人。

(二) 粉ミルクが日本に来てから。

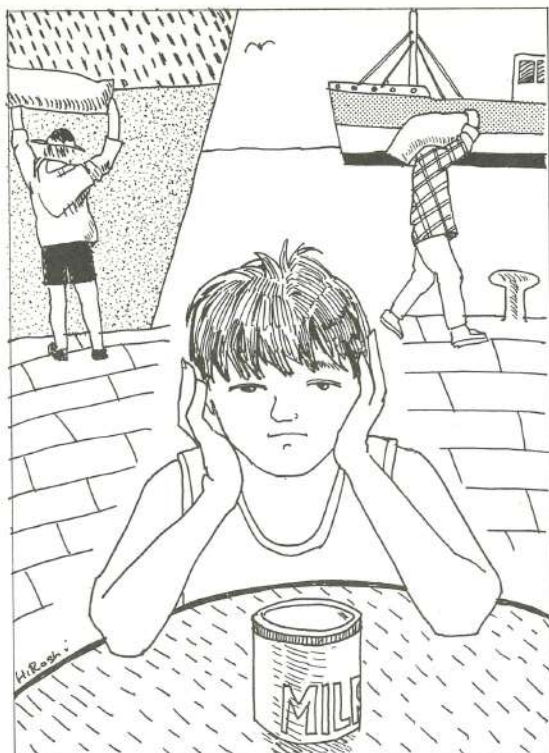
汽船から荷をおろす人、それを倉庫にはこぶ人、倉庫の番人、売りさばきの商人、広告をする人、小売の薬屋、薬屋にまでかんをはこぶ人、薬屋の主人(中略)

僕は、粉ミルクが、オーストラリアから、赤ん

坊の僕のところまで、とても長いリレーをやってきたのだと思いました。工場や汽車や汽船を作った人までいれると、何千人だか何万人だか知れない、たくさんの方が、僕につながっているんだと思います。でもそのうち僕の知っているのは、前のうちのそばにあった薬屋の主人だけで、あとはみんな知らないにきまっています。僕は実にへんだと思いました。

それから僕は、床の中で、暗くしてある電灯や、時計や、机や、畳や、そのほか、部屋の中にあるものを、次から次へと考えて見ました。そうしたら、どれもみな、ラクトージェンと同じでした。とても数え切れないほど大勢の人間が、うしろにぞろぞろとつながっているのです。でも、みんな、見ず知らずの人ばかりで、どんな顔をしているんだか、見当はつきません。

その晩、まだほかに、なんだかいろいろ考えたのですが、そのうち眠くなって寝てしまったので、忘れてしまいました。しかし、今いったことだけは、翌日になっても覚えてました。僕は、これは一つの発見だと思います。だって、今まで、ちょっと考えなかったのに、そう思っただけで、何から何まで、みんなそうだとわかったからです。僕は、学校にゆく途中や、学校に行ってから、な



んでも手当たり次第、目にはいるものを取って考
えて見ましたが、どれもこれも同じでした。そ
して、数え切れないほど大勢の人とつながって
いるのは、僕だけじゃあないということを知りま
した。僕は、教室で先生の洋服や靴のことを、てい
ねいに細かく考えて見ましたが、やっぱり同じだ
ということを見ました。先生の洋服は、オー
ストラリアの羊からはじまっています。

だから、僕の考えでは、人間分子は、みんな、見
たことも会ったこともない大勢の人と、知らない

うちに、網のようにつながっているのだと思いま
す。それで、僕は、これを「人間分子の関係、網
目の法則」ということにしました。僕は、いま、こ
の発見をいろいろなものに応用して、まちがって
いないことを、実地にためしています。今日は、ア
スファルトの道がやっぱりそうだということに気
が付きました。また、数学の時間に、先生の頭や
ひげも床屋につながっていると考えていたもので、
久しぶりで先生から注意されました。しかし、発
見のためには、先生から叱られることも我慢しな
ければいけないと、僕は思っています。

まだ書きたいのですが、お母さんが、もう寝な
さいと言います。だから、報告はこれでやめにし
ます。叔父さんは、僕がこの発見を打明けた最初
の人です。

(吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」岩波文
庫より)

(註) 本文は一部、拙著『共生時代の食と農』(家
の光協会、近刊) および『NOといわれる日本』(日
本消費者連盟編、学陽書房、近刊) の文と重複す
るところがあります。内容等に関心をもたれた方
は、合わせて御一読いただければ幸いです。

良いバナナと悪いバナナ

台所からアジアが見える草の根輸入貿易

堀田正彦

この六月二十九日、神戸港にはるばるフィリピン・ネグロス島から運ばれてきた、十トンの無農薬・自然栽培のバナナが陸揚げされた。草の根輸入によるフィリピン・ネグロス島産バナナの第二便である。いま日本には同じフィリピンから年間八十七万トン以上ものミンダナオ島産の多国籍企業ブランドのバナナが輸入されている。その巨大な量にくらべてこれはわずかに十トンにすぎない。まさに大海の一滴である。しかしこの十トンのバナナの輸入成功は、海を越えて多くの人びとが「希望の連鎖」で互いを結び合い始めた証左なのである。お互いの暮らしを「ひとつのもの」として考えはじめた、その第一歩なのである。

フィリピン・ネグロス島から「無農薬・自然栽培のバナナを輸入しよう」という話が最初に持ち上がったのは、昨年の七月だった。第一便の十トンが輸入されたのは今年の二月だが、最初の話から数えれば今度の第二便の入港まで、丸一年かかったことになる。これだけの時間がかかって、しかもわずかに二十トンの輸入である。草の根輸入の草の根たる所以であるが、それにはやはりそれなりの理由がある。その理由の説明を通して、なぜ「無農薬バナナ」の「草の根輸入」なのかを説明していこうと思う。

緑豊かなネグロス島でなにが起きたか

フィリピン中部にあるネグロス島は、長年、フィリピンの主要輸出産品である砂糖の生産地として知られてきた。ネグロス島だけでフィリピン産砂糖の六十%を産出し、島全体が砂糖キビ産業に依存することで成り立ってきた。ところが、八十年代半ばに国際的な砂糖価格の暴落が起き、農園主は砂糖の作付けを控え、多数の農園労働者が職を失い、島全体が貧困と飢餓に襲われることになったのである。飢餓と貧困に拍車をかけたのは、この島の砂糖キビ産業の顕著な特徴である半封建的な大土地所有制であった。人口のわずかに二、三%の人間が殆どの耕作地、土地を所有し、残りはその土地で働く土地なしの労働者に過ぎない。自ら耕して食料を自給する土地を持たない大多數の民衆は、唯一の仕事である砂糖産業が崩壊すると、たちまち、その日の食事にこと欠く有り様となった。

ネグロス島には緑したたる広大な大地がある。ところがその大地はその土地を耕し、その土地に住む人々の暮らしを支えるさまざまな農作物を育む

のではなく、先進国に輸出され外貨を稼ぐための熱帯農産物（砂糖キビ）を生産する土地なのである。そこにあるのは「農業」ではなく「産業」であり、「農民」ではなく「農業労働者」なのである。彼らは小作農ですらない。この底辺のひとつと、つまり人口の七十%以上を占める大多數のひとつとにとって、この親代々連綿と続く慢性的貧困と飢餓から抜け出す道は「土地改革」による農地の適正な分配と、自給のための農業の振興と活性化しかないのである。

「土地改革」はアキノ政権登場の最大の公約だった。八七年二月にアキノ新政権の下で批准された新憲法には、「農地改革の実施」が定められ、人々は大きな希望を抱いた。アキノ大統領は七月になつてようやく「包括的農地改革計画（CARP）」を発表し、議会に提案した。しかし、農地の保有限度、地主への補償、改革実施の際の優先順位などの「改革」の本質を左右する詳細の決定はフィリピン議会に委ねられてしまった。こうした過程に、土地なし農民たちは土地改革の実現に対する希望を失なっていた。というのは、新憲法下の総選挙で形成されたフィリピン議会は、上下両院とも、ほとんどが地主エリート階層出身者によって占められていたからである。議会では、ネグロ

ス州選出議員をはじめとする大地主層の強硬な抵抗があり、本来議会上程後九〇日で法案制定に至るはずが、審議だけで一年を費やしたばかりでなく、結局、できあがった法案は「抜け穴」だらけの地主層に有利な法案になってしまったのである。それが八八年六月一〇日にアキノ大統領の署名をもって公布された「包括的農地改革法（CARL）」である。

曰く、「地主の農地保有限度は五ヘクタールまでとする。が、一五才以上で農業経営に従事するそのこどもには一人あたり三ヘクタールの所有を認める」。こどもが五人いれば、地主家族の保有面積は二〇ヘクタールとなる。フィリピンの家族は大家族である。こどもの数も多い。さらに養子縁組という方法もある。こどもはいくらでも増やすことができる。分配する土地が無くなるまでこどもを増やせばよい。さらに、この農地改革は段階的に実施される。まず、公布から四年以内に、米、トウモロコシの小作地、全体休耕地と耕作放棄地、地主の自発的提供地、差し押さえ農地など。第二段階として、公有農地と五〇ヘクタール以上の私有農地が対象となる。第三の段階として、二四ヘクタール以上五〇ヘクタール以下の私有地が、法案発効後四年目から三年以内に完了。二四ヘクタール以下の土地は六年目から改革を実施し四年以内に完了。エビ養殖池、畜産等商業的農場については、法案発効後十年目以降に収用・分配の対象とすることになっている。事実、ネグロスの地主たちは砂糖キビ畑を次々にエビ養殖池に転換している。

しかも、地主たちは農地改革で失うことになる土地に「適正な価格」での補償を受けることができる。一方、土地の分配を受ける農民たちは、フィリピン土地銀行に対し、年利六％の三十年賦償還で地価を返済しなければならない。有償の土地分配である。土地資本が金融資本に変わるという話で、土地改革によって貧富の差が解消されるわけではない。

「親代々の貧困と労苦は土地代を払ってもおつりがくる。土地は無償で分配すべきだ。」農民たちの偽らざる気持ちである。

この五月、日本が『リクルート・スキヤンダル』で揺れていた頃、フィリピンでは農地改革省の『土地ころがし・スキヤンダル』が新聞を賑わしていた。農地改革省の役人が過剰地価を承知で、一企業から、その企業が元の地主から転売を受けた価格の十数倍の値段で農地改革用の土地を買い上げたのである。この異常な高値は、そのままだつ



庭先に植えられたバナナ。バナナは彼らの生活に欠かせない

たら分配を受ける農民たちが払わされることになってしまふ。この醜聞は幸い公になった。日本での対比多国間援助の協議が始まる直前、アキノ政権はさすがに農地改革大臣の首をすげかえたのである。

さらに、二八〇億ドルにのぼるフィリピンの累積債務の問題は、国家の政策策定の選択の幅をせばめている。このため、民衆の願う自給農業の振興開発の道も政策的にはかえりみられないままである。

第三世界に対して債権者を代表する世界銀行、国際通貨基金（IMF）は、累積債務返済に役立つ政策の推進を強力に望んでいる。フィリピンにも、外貨を稼ぐ輸出志向型農業や外国資本による労働集約型輸出産業の導入を推奨する。「底辺民衆の自立よりも、まず上手に借金を返さない」という方針である。世銀はアキノ政権に対して「労働者に今後五年間にわたってストライキ権を放棄させよ」と勧告し、アキノはそれに従う姿勢を明示している。また農業においても、外国資本の導入を進め、経営を多国籍アグリビジネスにまかせ、輸出換金作物の大農場生産によって競争力のある産業に育成しようという構想が語られている。

民衆の自立への希求高まる

まさに、このような制度的構造的な「八方ふさがり」の中で、ネグロス島の民衆に代表される多くのフィリピン大衆はそれぞれの自立の道をさぐらねばならないのである。

彼らはこの「八方ふさがり」を「不正義・不平等」と受け止めざるを得ない。こうした民衆の潜在的な不満のエネルギーは共産党・新人民軍の武装闘争を支える原動力にもなっている。アキノ政権は「対共産ゲリラ全面戦争」を政策化した。消費ブームに沸く首都マニラを一步離れた、ヴィサヤ、ミンダナオ、ルソン北部等の地方では、二十五万人のフィリピン政府軍が強力な軍事作戦を展開している。これは、ゲリラの泳ぐ「人民の海」を干し上げようという作戦である。直接的にはゲリラでなく、民衆である。砲爆撃により民衆を強制疎開させ、選別し、武器を持たせ、ゲリラに対する民兵に仕立てる。徹底した反共宣伝を軍が行い、反共自警団や地主の私兵が横行し、武器があふれる暴力的な日常が定着する。農村は働き手を失い疲弊する。農作物の不足が起き、物価が高騰する。

「反政府勢力の掃」はアキノ政権の主要な課題である。いまや、全ての民衆を一扫しかねまじき勢いである。

ネグロス島ではこの四月、三万五千人という史上空前の強制立ち退きによる避難民が発生した。これらのひとびとは突然の砲爆撃にさらされ、家を焼かれ、畑を失い、身一つで土地を捨てざるを得なかったのである。長年切り開いてきた畑にも戻れず、生計の保障も無く、茫然と日を過ごしている。

しかし、このような状況であればこそ、ネグロス民衆の自立への希求はむしろ高まるばかりなのである。人口の六〇％以上を占める貧困層の自立こそ、ネグロスのみならずフィリピンの抱える諸問題への根本的な解決の第一歩だと思えるからだ。

日本の消費者とネグロスの出会い

三年前、日本ネグロス・キャンペーン委員会が設立され、当時、最も深刻な砂糖危機による減反・失業・貧困に苦しんでいたネグロス島の民衆に対して、日本の市民が、直接、支援と協力を行



▲栄養失調で入院した砂糖労働者の子ども

▼砂糖労働者。刈り取られた砂糖キビを担いでトラックに積み込むのが、彼の仕事だ



おうという呼びかけがなされた。予想を越える大きな反響があり、日本ネグロス・キャンペーン委員会は多くのひとびとの支援に支えられて、現地ネグロス島の市民団体や教会や労働組合に対する直接的な支援活動を展開することができた。日本ネグロス・キャンペーン委員会は当初、いわゆる「緊急救援」として医薬品や食料衣類の直接配給を活動の中心に据えたが、現地の民衆団体は、配給される食料に依存する生活ではなく、自分自身の手で生きる糧を生み出すための「自力回復計画」の導入を訴え、地主から借りたわずかな土地で行う「共同耕作」や「自主開墾」による農地の獲得や「共同家畜飼育」「共同売店」など、ネグロス島の民衆が自ら提案する「小規模自立計画」への支援の必要性を強く主張した。四八件におよぶこうした小規模自立計画が資金支援を受け実施された。これらの資金で、無一物の農業労働者や小農民が種籾を買い、農機具を手に入れ、肥料を作って共同で借地や荒れ地の開墾を行い、あるいは米、油、食料品などを共同購入し、市価より安い価格で村民が買える「売店」を開いたりした。一九八六年後半から始まったこうした小規模計画は、最初の資金をもとに継続的に実施している成功例もあるが、八七年後半から激しくなったネグロス全島にわた

る軍事作戦の影響を受けて中止を余儀なくされるところもあり、すべてが順調に推移しているわけではない。しかし、自分たち自身の力で生産活動を行うという体験は、農園で「働かせてもらう」だけだったひとびとに、自力で生きることへの展望を垣間見させる試みとして貴重な経験の蓄積となった。

と同時に、こうした自立計画を自らの手で進める中で、彼らは、農業に対する技術の欠落、知識の欠如、管理運営の未熟という自分たち自身の抱える問題を改めて確認、点検することが可能になったのである。

大地と働くものとの亀裂

ネグロス島の砂糖キビ産業の仕事はきわめて分業化された仕事である。これは砂糖キビという植物の性質が決定づけたものでもある。砂糖キビは、九か月から一二か月で成熟するが、成熟した砂糖キビは糖度が一番高くなる時に素早く刈り取り、すぐ製糖工場に運んで樹液をしぼり粗糖にしてしまわないと醗酵してしまいつかいものにならなくなる。そこで、砂糖キビの成熟する季節になると、ひ

たすら砂糖キビを刈り取り、運び、製糖するとい
う作業が繰り返される。だから、砂糖キビ労働者
の仕事は、一日中広大な畑の固い砂糖キビを「エ
スパディン」という山刀で切り倒し、細い足場を
上ってトラックに積み上げる作業の繰り返しであ
る。農民ではなく、労働者である所以だ。しかも、
極端な低賃金である。一日収入が二〇から三〇ペ
ソ（一四〇から二一〇円）というのが相場だ。日
本の大学生のバイト時給の半分以上に過ぎない。し
かも、砂糖キビは成育に一定の雨量を必要とする

ので、乾期の間に植え付けをすませて雨期に十分
成育するようにしなければならない。だから、乾
期には刈り取りと植え付けが同時に進行し大量の
労働力を必要とするが、雨期には砂糖キビの成育
を待つだけであり、反対に大量の労働力が余るこ
とになる。労働者たちは雨期の、とくに六、七、八
月を「死の季節」と呼んでいる。この間、彼らの
収入は途絶える。地主に前借りする米代が唯一の
収入になる。地主に依存する以外には生きる道が
無い。この島には砂糖キビ産業以外に働く場所は



無いのである。

ほぼ一世紀にわたってこの島に定着した「砂糖キビ単一栽培産業」の持つ性格は、この島の農業と民衆の生活意識に多大な影響を及ぼしている。例えば、自主耕作を始めた労働者たちの畑が雑草だらけになる。労働者たちは親代々「地主の土地に生えるものは、草一本手をつけるな」と叩きこまれてきた。自分たちの畑（一時的な借地ではあるが）に雑草が茂っても、つい、手が出ないのである。労働組合の農業普及員たちは「これは自分らの食べる米だ。雑草は稲の養分を吸い取ってしまうぞ。抜かなければだめだ」と声を嗔らして指導したという。

また、開拓農民たちの農法も極めて後進的である。「カイギン」とよばれる焼き畑農業が主流である。国有地である山の斜面の草を焼き払い、土に棒で穴をあけ、そこにとうもろこしの種を落とす。それだけである。植えてただ育つのを待つ砂糖キビ農法と同じである。土と人との交流が無い。土を慈しむ農業は砂糖キビ畑からは生まれにくい。土地は不在地主か大地主のもの、収穫した作物は粗糖として外国に売られ、利益は一部の人を潤し、自分らは貧困にあえぐ。土と土に働く者との間には深い亀裂がある。この亀裂を埋めなければ、た

とえ「土地改革」があつたとしても、民衆自身、自分の土地を生かせぬままに終わるかもしれない。

自給自立の農業へ

そこで、労働者、農民のための「農業研修センター」の必要性が浮上してきた。「民衆の技術の交流、研修と学習、自立農業のモデルづくり」という目的を実現するために、八七年六月、日本からの資金支援によって「ツブラン農場」という研修農場が建設された。ここでは「小さな者たちが生きるための農業」をテーマに化学肥料や機械に頼らない低コストの自然農法の確立をめざして、与えられた環境の中でできるだけ生産を行うための農法の研修と研究が行われつつある。日本の有機農法や適正技術なども紹介され、農民、技術者の交流も行われるようになった。

自分たちの農業を学ぶ彼らは真剣である。事実、すぐ土と融合し始める。労働者や小農民の中にも優れた農業技術が埋もれている。農民同士の交流がそうした貴重な知恵と蓄積を引き出す。ここで研修した人々が自分の村に帰り、村の共同耕作地づくりを進める主体になる。土地が公に自分たち



ツラン農業研修センターで、実際に水田を耕す

のものとなるまでは、見捨てられた斜面や荒れ地を耕して自給自立の農業を続けるしかない。打ち棄てられていた斜面地が小さな段々畠の稲田になる。水牛が無いために、ある村では大人三人が水牛用の犁（すき）を引いて荒れ地を耕し、田植えをしたという。

日本ネグロス・キャンペーン委員会はこのような自主耕作に不可欠な水牛をネグロス各地におくるために、八八年には「水牛キャンペーン」を全国的に展開し、二〇〇頭を越える分の基金を集め、現地の団体を通じて順次配付してきている。

しかし、ネグロス民衆の自立の努力の前にたちふさがらる問題は「土地の独占」「農業資本の独占」だけではないのである。「市場の独占」「流通の独占」という問題も日常的な大きな問題としてたちふさがっている。

ネグロスの零細農民にとって、自分たちの農作物を市場に出す方法は二つしかない。

一つは、自分たちでかついで、近くの村や町のパレンケ（市場）に持ち込み自分で店を広げ買い手を持つことである。もう一つは、仲買人に一括して売り渡す方法である。

野菜や豆類や果物などの場合は、日常食料であるから、もしパレンケが歩いて行ける距離にあれば

ば直売することもできる。しかし、その量は人が担いで最低四キロから八キロの道のりを歩けるほどの量に限られる。もしこれが、タバコやコーヒード、アバカ、木炭、バナナなどの商品作物になると、山奥の村から大量の産物を運び出して大きな町まで運ばなければ商品化はできない。結局、輸送手段を持って村にやってくる仲買人に売り渡す以外に方法はないことになる。輸送手段も輸送経費も無いという農民の弱みを知っている仲買人の方は、ただ同然に買い叩いていく。また、仲買人は高利貸でもある。作付け資金や病気の治療代などの臨時出費を高利で農民に貸し付ける。収穫した農産物がこの借金の金利や元金として持っていかれてしまう場合もあるし、借金に縛られ、高値を付ける別の仲買人に自分の作物を売り渡すことも出来ない。また、農産物が豊作でだぶついたれば、遠隔地ではガソリン代の元もとれなくなる。山奥には芋や豆やバナナを貯蔵しておく設備もない。都市の貧困層の飢餓にも関わらず、山奥では収穫された作物が腐りかけのまま放置されるということがしばしば起きる。

ここにも、資本と流通手段を所有する者だけが利益を独占する「八方ふさがり」的構造が強く

存在している。これは零細な漁民の漁獲物の流通においても同様である。

現在のところ、砂糖キビ労働者は労働賃金が唯一の収入であり、米はもとよりほとんどの日用品を現金で買い入れなければならない「消費者」である。だから、いわゆる「生産者」としてこの「市場と流通の独占」による被害を直接的に受けるのは、海拔三、四百メートルから上の砂糖キビ畑にもならない丘陵山間部の公有地で、焼き畑農業を営む零細な開拓農民たちが主である。しかし、もし労働者たちが土地分配を受け自立農業を営むようになれば、これはすぐ彼らの問題になってくる

例えば、貧困と飢餓に苦しむ零細底辺層の農民、漁民、労働者にとりあえずの飢餓と栄養失調状態をカバーする食料・医薬品を与える「緊急救援」が行われる。さらに自給農業や収入向上計画を実施する「自力回復計画」が導入される。同時に、零細な生産性を最大限まで高めるための「農業技術研修・基礎経営講習」が研修農場において行われるとする。そして、これらの支援を通じて彼らの基礎的な自給農業が確立し、とりあえずの飢餓が克服できるようになるとすれば、次に必要となるのが現金収入の確保である。何らかの換金作物を栽培して市場に出すことにより、衣料・生活必需

品・教育などの費用を捻出しなければならない。しかし、それが旧態依然の仲買人による搾取的な流通システムによってなされるのであれば、ここまでの民衆の努力は水泡に帰してしまうことになる。

ネグロスでは、労働者、零細民の子弟のほとんどが小学校すら満足に通えない状況にある。「せめて小学校四年まではこどもを学校に行かせたい。年に一度は新しい衣服を家族に着せたい。せめて一日に二回は満足な食事を与えたい」。ネグロスの母親たちに共通の願望である。このささやかな願望を実現するには、搾取的な既存のシステムにかわる「もうひとつの市場・流通システムの確立」がどうしても必要となる。

バナナ作戦はこうして始まった

さて、われわれのバナナである。

われわれのバナナは、この「もうひとつのシステム」の確立に直接関係する試みなのである。この試みがネグロスにおいて具体的な形に発展するためには、ネグロスの人々の自分らの自立を阻む「八方ふさがり」的構造に何とか風穴を開けたいと

いう熱意と、日本の市民たちの「ネグロス民衆の自立への思いを支えてみよう」という、ささやかな、しかし確固とした決意とが必要だったのである。

話は一九八六年一〇月にさかのぼる。

この時、神戸港と石垣島の間を往復する「バナナ・ボート」という草の根市民団体による洋上イベントが開催された。このイベントを主催したのは、公害や原発の問題に取り組みながら、安全な食品の自給を目指して独自の有機・無農薬食品の共同購入を行っているいくつかの草の根消費者団体である。この「バナナ・ボート」には全国から一七五団体、五二〇名が乗船した。もともとの狙いが全国の草の根運動のネットワーク形成にあったからである。この他に石垣島・白保のサンゴを守る人々との交流や、徳之島で国産バナナを再生しようとしている生産者との交流が主なテーマだった。もうひとつのテーマとして第三世界との交流が掲げられ、ネグロスの代表も招待を受け参加した。

ネグロス代表は、島の状況を報告するとともに「自立のための草の根貿易」の提案を行った。これは、ネグロスの民衆自立のための基金を生み出

すひとつの方法として、「マスコバド糖」と呼ばれる伝統的な手作りのキビ砂糖を日本の消費者に直接輸入して貰えないか、という呼びかけだった。徳島暮らしを良くする会、共生社生協、中部リサイクル運動市民の会の三者がこれに応じ、日本ネグロス・キャンペーン委員会とともに実験的な「草の根輸入」に勇気をもって取り組むことを表明してくれた。大きな収穫だった。

もうひとつ収穫があった。それは「産地提携型」の新しい日本の消費者運動との出会いである。いわゆる「産直運動」である。消費者自身が生産者と直接関係をつくり、生産者と協同で消費者自身の納得のいく商品をつくり、予約共同購入による無店舗販売によって地域に自主的な流通ネットワークを形成する。この「自主生産・自主流通」の消費者運動との出会いに、ネグロスの代表は大きなインパクトを受けた。

ネグロス島内の産直サービスが始動

一九八六年二月、「民衆のための市場・流通サービス機能の確立」を目的とする民衆交易事業のセンターとして「オルター・トレード社」がネグロ

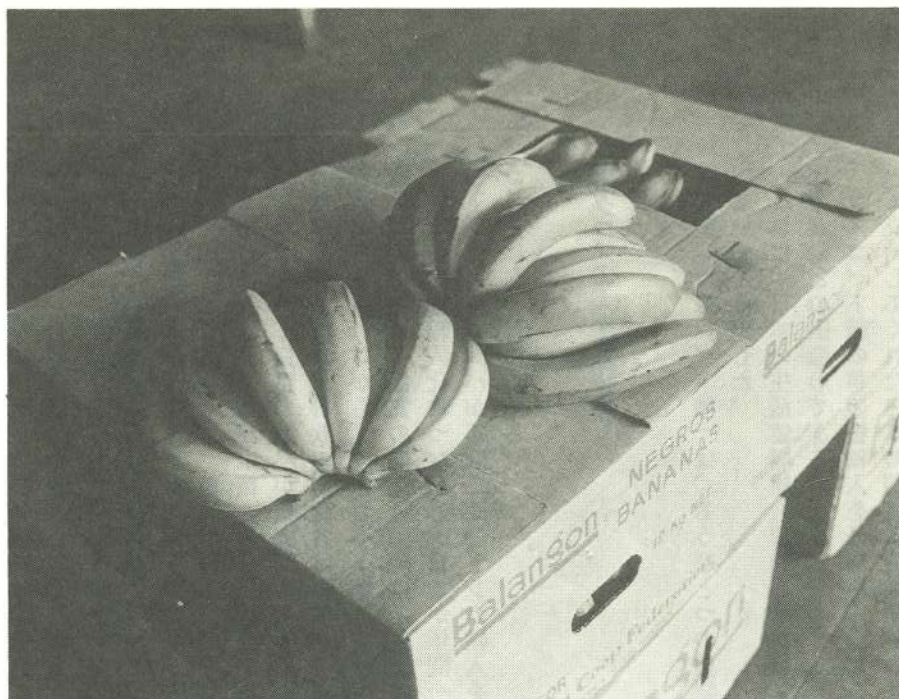
ス島バコロド市に設立された。

この民衆のための交易センターの活動の目的は、第一にネグロス島内の産直サービスである。中間の流通過程を飛ばし、生産者と消費者に少しでも多くの利益をもたらそうというのである。第二に、ネグロス島内の各地にどんな民衆産物があるかを調査し、島内外の適正な市場あるいは買い手をさがし、生産者の代わりに交渉し、生産者が「適正な」代価を貰えるようにするという役割である。

しかし、もとより無一文からの出発である。トラックもない、倉庫もない、資金もない、のないづくしである。最初で最大の課題は自立運営資金の蓄積であった。

「マスコバド糖」が初めて神戸に上陸

「マスコバド糖」の草の根貿易は、この自立資金の蓄積という彼らの基本的な目的を支援するため開始されたといえる。日本の草の根団体とネグロスとの間に「マスコバド糖一キロ、二〇〇円」という価格が設定された。うち五〇円は、この自立資金の蓄積ならびに民衆諸団体の生活向上プログラムに活用される基金となった。



オルター・トレード社によって、日本に輸出されるバナナ

「マスコバド糖」とは、近代的製糖工場が登場する以前に行われていた製糖法によって作られる含蜜糖である。一九一〇年以前にはほとんどのアシエンダ（砂糖キビ莊園）にマスコバドづくりの作業場があったという。現在では、わずかに二軒が残るだけであった。

「マスコバド糖」は砂糖キビを絞り、汁を煮詰め、攪拌して粉末にするだけの手作りの黒砂糖である。オルター・トレード社は、零細地主から砂糖キビを買いつけ、トラックを雇って作業場に運び、製糖してもらい、バコロド市に運び、スラムのお母さんたちに袋づめと箱詰めをしてもらい、マニラに運び、日本に向けて輸出したのである。

砂糖の袋づめ・箱詰め作業は、スラムの住民互助会が人員を割り振り、失業者ばかりで低収入に苦しむ彼らの臨時収入源としての機能を果たすことになった。

八七年三月、マスコバド糖一〇トンが初めて神戸に陸揚げされた。その後八月に二十トン、十一月に二十トンの計五十トンのマスコバド糖が輸入され各地でさまざまなひととによってネグロスの名前と共に購入されていた。

さらに同年、ヨーロッパの市民団体が日本に次いで「マスコバド糖」の輸入を開始した。日本よ

りも格段に砂糖の消費量の多い彼らは、後発にもかかわらず、日本の倍量を輸入してくれた。この二つのグループによる「マスコバド糖」の輸入によって得た利益で、八八年には自前の「マスコバド糖・製糖作業場」をネグロス島・サンエンリケ町に完成させるに到った。自前の製糖工場を持てたことにより「マスコバド糖」の品質管理が容易になり、極めて良質の製品が輸出できるようになった。それまでは、日欧の消費者はかなりの異物混入に悩まされながら「マスコバド糖」を使用していたのである。品質の向上は同時に、「マスコバド糖」の定期輸入化につながり、日本が年間一二〇トン、ヨーロッパが年間二四〇トンの輸入を行うことになったのである。

ネグロスの人々を訪ねて

この「マスコバド糖」は、もうひとつの重要な出会いを生み出した。

それは、日本の生活協同組合運動とネグロスの民衆運動との出会いである。

マスコバド糖の草の根輸入を最初から勇気をもって支持してくれた日本の消費者運動団体のひと

つに、共生社生協があった。共生社生協は、北九州、熊本を中心に六万人の組合員から構成され、地域に根ざした共同購買運動を展開していた。共生社は、マスコバド糖の購入を組合員に呼びかけるにあたり、まずネグロス島の状況を知ることから始めた。九州各地の地域生協で、スライドを通してネグロス島の報告を聞く集まりが実施された。

続いて、八八年九月には、十人づつの二回にわけて組合員、理事によるネグロス現地訪問が行われた。日本ネグロス・キャンペーン委員会は、ネグロス支援活動のひとつとして「現地へ行く、直接見る、地域で動く」という試みを実施していた。いわゆる「エクスポートジャー・ツアー（現地体験旅行）」である。共生社の訪問団も、一週間にわたってネグロス各地を訪れ、砂糖キビ労働者の家に泊まり、彼らの生活を実際に体験するとともに、困難の中で自立をめざして懸命に生きようとする彼らの姿をつぶさに見た。

低賃金、劣悪な住環境、守られぬ人権、収奪される自然、奪われる人間の生命。

ネグロスを訪れた生協組合員の大半は家庭の主婦であった。日本の日常とのあまりの落差に、皆一様に大きな衝撃を受けたようだった。と同時に、その困難と貧しさの中で、人間としての尊厳を求



▲自分の体重ほどもあるバナナを、山から担いで降りる女性たち

▼バナナの洗浄や箱詰めにも携わるキリスト教基礎共同体の人々



めて生き抜いているネグロスのひとびとのしなやかな明るさに触れ、彼らの人間的な結びつきの豊かさに驚き、貧しいひとびとが語る「協同」という言葉のもつ清新な力にあらためて共感したのである。それは同時に「人間の真の豊かさとは何か？」という、自らへの厳しい問い掛けを余儀無くするものでもあった。

だれのための「命・暮らし・自然」か

「いのち、暮らし、自然を守る」というのが、彼ら生協の基本のテーマである。ネグロスとの出会いの後、それまで主語も無く語られてきた「いのち、暮らし、自然」が、一体「誰」の「いのち、暮らし、自然」なのかと、あらためて問われるようになったのである。日本の私たちだけのそれらが守られればいいのか？ 地域生協は地域の組合員だけのものなのか？ この深い問題意識は、その後の彼らの生協運動に引き継がれることになった。共生社生協の中に「ネグロス・キャンペーン事務局」が結成され、報告会やカンパ活動が活発に行われ、大きな力を結集したのである。

一九八八年三月、共生社生協連合と福岡地区生

協連合が合併し、新たに「生協連合グリーン・コープ」が結成された。

結成直前の八八年二月、福岡地区生協連合のひとびとがネグロスを初めて訪問した。福岡地区生協連合には、八六年九月に、当時日本ネグロス・キャンペーン委員会の招きを受けてネグロス島の実情とともに「農業研修センター設立」の必要性を訴えるために来日していた、ネグロス島の砂糖キビ労働者組合（NFSW）のサージ書記長が交流のために立ち寄っている。それ以来の「ネグロス」だった。生協連合グリーン・コープの新設にあたり、共生社生協の人たちが「ネグロス」を通して投げ掛けてきた問題意識を実地に共有するのが一つの目的だった。

この訪問団は、地域生協の専従役員を中心としたグループだった。役員といっても、皆実際に地域の組合員や田舎の生産者たちと共に生協づくりをしてきた人たちである。実際の経験に裏付けされた質問や討議が活発に行われた。この交流で話題になったのは、民衆の流通機関でありながら自前のトラックが無いのは致命的であるという指摘であった。また、民衆のための金融サービス機能の必要性も指摘された。どちらも「民衆のための市場・流通サービス」を行うためには不可欠の要素

である。日本側はスペイン・モンドラゴンの信用協同組合による市民的自立社会の例を紹介した。民衆ひとりひとりの自立を民衆自身が技術的に経済的に支えることのできる「民衆経済活動の理念と夢」が語られた。

そして、ネグロス側の現下の問題は明らかである。必要不可欠なものを手に入れる為の資金をどうするかという事だった。この問題の現実的な解決は、ネグロス・オルタートレード社の唯一の商品である「マスコバド糖」の継続的、定期的輸入実現による収入確保だった。そこで、定期輸入の大きな障害であった「異物混入」の問題が討議された。先に述べた「マスコバド糖の品質の改善」はこの専門家グループのネグロス訪問によって具体化したのである。提案は、「製糖作業場の屋根を高くし、風通しを良くする。同時に、開け放しだった工場を壁で囲み、ほこりの流入を防ぎ、全てのプロセスに濾過の金網を入れる。固まりを選別し、キメ細かな製品にする。」というものだった。ネグロス側はさっそく改善に取りかかることになった。

日本側は、継続・定期輸入を可能にするため組合員に討議して貰うよう提案することをネグロス側に約束した。一夜民泊し交流した漁村で「すぐ

沿岸まで来て、魚をねこそぎにしていく日本の漁船のことをどう思うか？ 日比友好通商条約がそれを許しているのを知っているか？」と問い詰められたことが、日本で消費者運動を長い間やってきた彼らにはなんとも言えぬ衝撃だったようだ。こうした経験が生協の中に戻されて行った。

新たに結成された生協連合グリーン・コープは、第一回総会で「アジア・第三世界への連帯」を目標の一つに掲げ、とくに、「ネグロスとの連帯を通して、第三世界への理解と連帯を確立すること」を決議した。このような経過の中で、マスコバド糖の定期輸入も確定され、八八年七月には、生協連合グリーン・コープの代表がネグロスを再度訪問し「年間一二〇トン七回に分けて定期輸入すること」を取り決めたのである。

体に良いのがおいしいバナナ

基盤はできた。相互の熱意と決意がようやく全体の形を顕しはじめたのである。「ネグロスからバナナを輸入しよう」というアイデアは、この基盤があっけはじめて生まれてきたものだった。

バナナを輸入しようというのは、ある意味では

自然の流れだった。

草の根貿易商品第一号の「マスコバド糖」は、砂糖キビから手作りされる含蜜糖であり化学的な処理をしない自然の商品である。大規模な製糖工場で結晶化・精製される純粋の蔗糖、つまり白砂糖とは違う。だから、甘さを控え目にする食生活が一般化し、純粋のカロリー源でしかない白砂糖は出来るだけ使わないようにして健康を守ろうという意識が高まる中で、ミネラル類の豊富な「マスコバド糖」はとりあえず受け入れられ使われている。しかし、たとえ自然の「マスコバド糖」でも糖類の消費を大々的に訴えていくことははばかれる。

また、ネグロスにおける「砂糖キビ」は、長い間、一部の人間を富ませ底辺のひとびとを苦しめてきた「植民地農産物」である。ネグロスのひとびとにとっての自立とは「砂糖キビからの解放」にはかならない。「マスコバド糖」は皮肉な商品なのである。理念的には「マスコバド糖」をつくらないですむようになりたいのである。

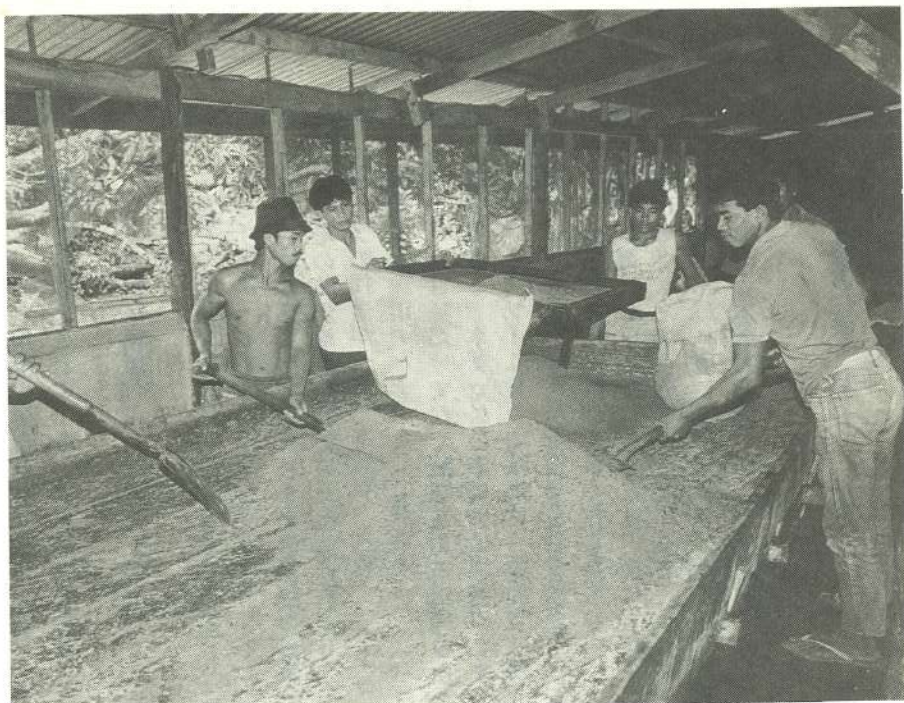
一方、ネグロスのバナナは、これまで経済的に虐げられかえりみられることもなかった作物である。自家消費以外には、仲買人だけが儲かるシステムで流通してきた。しかし、フィリピンならど

この家にも二三本のバナナが植えられていることからわかるように、バナナは育てやすく、手が掛からず、誰にでもできる作物でもある。なにしろフィリピンはバナナの原産地である。現在でもネグロスの山間部には、実の中に黒い種子の詰まったアケビのような原種に近いバナナが自生しているほどだ。

もし、このバナナが草の根貿易で日本の消費者に直接送れるようになれば、ずいぶん多くのひとびとが関与できることになる。しかも、産直が可能になるだけで利益はこれまでの倍になる。事実、ネグロスのオルター・トレード社は、すでに「サバ種」という甘味が少なくて芋のように澱粉が多い種類のバナナを、ネグロスからマニラのバナナケチャップ工場に売る産直ルートを開拓しており、その経験からだけでも生産者にこれまでの一・五倍の利益をもたらせることがわかっていた。

日本側にも、バナナは意義のある産物だった。

八十年代に入り、安いフィリピン産のバナナが市場に大量に出回ることが定着する中で、例えば「バナナと日本人」（鶴見良行者・岩波新書）という、バナナ・プランテーションの実態を報告し、日本人の消費動向と多国籍企業による経済活動が、第三世界に対する環境破壊の人権軽視型の「開発」を



マスコバド糖の生産風景。煮つめて結晶化した砂糖キビの搾り汁を、ふるいにかけて仕上げる

仲立ちとして、深く結ばれていることを明らかにする著作などが出版された。これを契機に、環境問題や人権問題に関心と関わりをもつ市民の間では「バナナを食べない」ことが当たり前のことになっていった。当然、農業や食品添加物に対して強い反対意見を持つ生協連合グリーン・コープの組合員たちの間には、農業が大量に使われていたり、労働者の人権を軽視して安く作られているプランテーション・バナナを食べないひとびとが多かった。しかし、バナナそのものは「完全栄養食品」と呼ばれるほど、バランスの取れた、食べやすい果実であり、とくに乳幼児に対する栄養補給食品としては魅力的な食品である。「無農薬のバナナがあったらねえ」というのは組合員たちの偽らざる気持ちだった。「もし、無農薬のバナナが輸入できれば……」現在大量に出回っている多国籍企業の大量生産バナナと対比させつつ、私たち自身の食生活を取り囲む「開発」輸入型の経済システムがより具体的に理解できるようになる。バナナは「食品」であると同時に「教材」にもなるのは、という予感もあった。

ネグロスと私たち双方のこんな思いが「草の根貿易によるバナナ輸入の実験をやってみよう」という合意となって結実したのである。実験にかか

るすべての費用は生協連合グリーン・コープが全額負担することになった。八八年七月のことである。

さまざまな種類のバナナがテーブルの上に並べられた。

「サバ」「トゥルダン」「ラカタン」「ムラド」「セニョリータ」そして「バランゴン」すべてネグロスの市場から買ってきたバナナの品種の見本である。その時現地を訪れていた生協連合グリーン・コープの代表が一本一本味わった後「バランゴン」を輸出実験用のバナナとして選り出した。「バランゴン」は甘味だけでなく酸味もある風味ゆたかな品種である。ネグロスの市場では緑色のまま売られている。フィリピンでは余り一般的ではなく、ネグロス島とパナイ島で珍重される品種だという。ネグロス島では山間部で多く作られている。(この品種の選択が正しかったことは、後に、日本に到着したバランゴンを試食したこの道三〇年のバナナ業者が「これほどの風味とコクのあるバナナは珍しい」と太鼓判を押したことで証明された。)

バナナ輸入にチャレンジ

九月には、生協の農産物担当の専門家がネグロスを訪れ、実際のバナナ輸入の基本的なプロセスの検討と確認を行った。彼はまず、日本のバナナ輸入業者や青果会社や船会社を廻り綿密な聞き取り調査をした。

どこでも聞かされた話は「バナナ輸入はほんとに難しい」ということばかりだった。「素人がやるのは不可能ではないか」とまで言われたという。実際、日本へのプランテーション・バナナの大量輸入は、大資本のアグリビジネスが専門に開発した大規模なバナナプランテーションの農園設備と管理・作業システムと専用のバナナ船を運搬に使うというところで可能になっている。それでもひどい時には三十%ぐらいが熟してしまうこともあるという。

何が難しいのかというと、まずバナナがきわめて熟しやすいデリケートな果実であるということだ。バナナは成熟する過程で自らエチレンガスを排出する。同時にエチレンガスはバナナが熟成を始める引き金にもなる。狭い船倉に大量のバナナを積み込むと、どれか早めに熟し始めたバナナが出すエチレンガスが影響し、他のバナナの追熟も始まってしまう。そして七日後に日本に着いた時にはバナナ全部がすっかり黄色に熟していた、と

いうことになる。ところが、日本の植物検疫法では「日本に輸入されるバナナは未成熟であること」という絶対条件がつけられている。黄色に熟したバナナは輸入できない。なぜなら、成熟したバナナは身がやわらかくミバエや他の害虫類の卵、幼虫の混入が考えられるからである。黄色いバナナが陸上で熟したか船倉で熟したかを見分けることは難しい。だから、港に着いた時点で成熟している柔らかいバナナはすべて廃棄処分となる。あるいは、虫の混入の発生程度によって「青酸ガス」か「臭化メチルガス」による燻蒸を受けて入荷が許可される。

多国籍企業はこの難しいバナナ輸入を成功させるために、最低条件として以下のような原則で輸出を行っている。「同じ成熟度のバナナを集めること」。「バナナは刈り取ってから二十四時間以内に十三・五℃から十五℃の温度に冷蔵すること」。「この温度のままで日本まで運ぶこと」。これは、多国籍企業が開発したノウハウである。同時にミンダナオ島のバナナ・プランテーションでは、この条件を満たすようにすべての仕組みが作り上げられている。バナナの成熟度を揃えるために専門の労働者が毎日農園を歩いては、バナナの成長具合を示す色付きのテープを幹に巻いて歩く。刈り取

られたバナナは三十分以内に選別され計量され箱詰めされる。船はバナナ専用の冷蔵船である。港は農園から二時間以内にある。港までの道路は立派なコンクリート舗装である。これらはすべて「輸入されるバナナは未成熟でなければならない」という絶対条件をクリアするための話である。さて、これだけの「最低条件」をネグロスのひとびとは実現できるのだろうか？ 生協の農産物担当の彼は、つくづく溜め息をついてしまったのである。

「それはとても挑戦的な話……です。」

彼が「バナナ輸出の最低条件」の説明を終えると、ネグロス・オルター・トレード社のスタッフは感にたえぬという調子でこう言った。

確かにこれは「挑戦的な」話なのである。

生協の彼と共に見て廻ったネグロス島のバナナの畑は、どれも山か丘陵地帯の斜面地を開拓したものだった。ネグロス島で道路というと全周六百キロほどの島の周囲をぐるりと海岸沿いに走るハイウェイと、西側と東側をつなぐ横断ルートが二本あるだけだ。ネグロスの土地の値段はハイウェイからの距離で決まる。ハイウェイに近いほど地価が高い。バナナの産地に通じる道はハイウェイからさらに内陸に入って行く農道に毛の生えたよ

うな石ころ道である。しかも、車が入れるのはそこまで、ほんとのバナナの畑には車が止まった所からさらに歩いていくか水牛の引くソリに頼って行くしかない。

「バナナの冷蔵」も考えものだ。「冷蔵する」には電気が要る。電気はバコロド市のような都市部にしか無い。だが、「十三・五℃から十五℃」に調整できる冷蔵設備はどこを捜してもない。あるのは日本向けのエビを冷凍する設備か製氷設備だけである。たかが、バナナである。刈り取りから二十四時間以内に冷蔵すること自体「驚天動地」のできごとではないか。また「冷蔵」したままだうやってマニラまで運びさらに日本まで運ぶのか？バナナの熟度の問題もある。ネグロスのバナナは生活に溶け込んだ伝統的な地場作物である。農民はほぼ完熟に近い状態で刈り取り、出荷する。しかし、遠く日本に運ぶためには七十％程度の熟度で刈り取って貰わなければならない。農民からすれば「そんな未熟なものを日本のひとたちにやるのは失礼だ」ということになる。そこをなんとか誤解のないように理解して貰えるものかどうか。いざ、バナナを日本に送るとなるとこれだけの難問が山積みになったのである。

基本的な問題はバナナの「輸送」である。

第一に産地からの積み出し、第二にネグロスからマニラへの輸送、そしてフィリピンから日本への輸送である。さらに輸送にともなう「冷蔵」の問題である。これ以外の問題は、オルタートレード社のスタッフとバナナ生産者との間で解決されるはずである。農民たちはバナナと共に暮らしている。細かいバナナの生態などを含め彼らの知恵を借りるしか方法はない。

生協の担当者とネグロスのスタッフと共にマニラとネグロスの海運会社を訪ね歩いた。バナナを輸送できる冷蔵コンテナ船を探すためである。十トンのバナナを日本に輸出するには四十フィートコンテナと呼ばれる冷蔵コンテナが必要である。バナナを運ぶためにはさらにそのコンテナに通風設備がついていなければならない。大きな会社ではすべて予約済みでコンテナを回せないとか、小さな会社にはそんな最新設備は無いとか、なかなか船の手配もつきにくい。ネグロスからマニラまでの輸送はどうやら「空輸」によるしか方法は無いようだった。フィリピンから日本への国際海運にしても冷蔵コンテナの予約が確定しない。実際にバナナが日本に無事届くかどうかをテストするにも船がなければやりようが無い。船の確保ができるまで、他にやるべきことをチェックし、可能性

をさぐるようになった。

ネグロス・オルター・トレード社の代表スタッフは建築士である。「刈り取りから冷蔵までを二十四時間」という作業の進行表は彼が作成することになった。出来上がった作業進行予定表は壮観だった。

まず「バナナの刈り取り」には十五人の農民があたり。刈り取ったバナナを「水牛ソリまで運ぶ」人間が三十人。十台の水牛ソリが用意され二人づつ人間がついて、山路を二時間でトラックの待つ「山のふもとまで運ぶ」。ソリは三往復する。下りてきたバナナを「房に切り分ける」人間が三人。切ったバナナの房を「トラックに積み込む」人間が六人。朝六時から刈り取りを始め、トラックの積み込みが完了するのが夕方四時。そしてトラックはバコロド市まで四時間で「バナナを運ぶ」。バコロド市のオルター・トレード社の一階がバナナの箱詰め作業場になる。これまで「マスコバド糖」の袋詰めと箱詰めをやってきたスラム住民の互助会が、バナナの箱詰め作業も担当することになった。バコロドに着いたバナナはまず「選別・房分け」され「水洗い」され「乾燥・拭き取り」され、「計量」し「箱詰め」される。この全工程に六七人。二交代の徹夜作業になる。延べにすると

一八〇人ほどの人間が関わる大作戦である。

農民たちから必要な情報が寄せられた。バナナが刈り取られてから日本に到着するまで七日から十二日を要する。この日数の間「未成熟」のままであるためには、いつ、どの時点でバナナを収穫すべきか、ということが大問題だった。農民たちの情報は「熟度七十%という」と、バナナの花を摘んでから三ヵ月目ぐらいだ」ということだった。「バナナは植えてから九ヵ月で実が完熟する。花が開いて房ができて、六段ぐらいになったところで花を摘む。そこから四ヵ月で完熟だから、三ヵ月目ぐらいが七割のでき」というわけである。そこでバナナを摘果するのは「三ヵ月と一週間前後」ということに決めることができた。これなら刈り取った後で二週間から三週間の追熟期間があるということになる。

「みんな面白がってるよ。こんなワクワクする話はないって……」農民たちと話した時の様子をスタッフの一人が報告した。「自分らのバナナが日本まで行くなんて、育ててる本人がこのネグロス島から一歩も外へ出たことがないのに、すごい話だ」「俺たちだけでこんだけのことがやれたら大したものだ……」。農民たちは興奮していたと言う。

ネグロス島は前に述べたように現在でも大土地

所有制に基づく封建的な風風の強い所である。地主たちは「アモ（御主人様）」と呼ばれ、労働者や小作人の生殺与奪の権を持っているかのように振る舞う。そうした階級の人々は、労働者や農民のことを「無知で怠け者で、なんでも地主に頼ればいい」と思っている駄目なやつらだ」「地主がいなければお前らには何もできない」と公言してはばからない。こうした風土の中で農民労働者が組合をつくり力を合わせ自力更生をめざすためには、並大抵ではない努力と創意と工夫が必要となる。まさにこの「バナナ大作戦」は、始まりから終わりまで自力でなし遂げなければならない初めての大事業の機会なのである。だれもが興奮したはずである。それは文字どおり「挑戦的」な出来事だった。

ネグロスからマニラへの輸送はやはり「空輸」しか無いという結論になった。ネグロス島には冷蔵コンテナを所有する船会社が無いのである。島内で、切り取ったバナナを二十四時間以内に冷蔵することは不可能である。箱詰めが終わったものをマニラに「空輸」して外国航路の船の冷蔵コンテナに直接積み替えるしか方法はない。そこで「刈り取りから冷蔵まで三十六時間」という設定でバナナ作戦を実験してみることにした。飛行機は

民間会社のチャーター輸送機を使うことにする。チャーター料はバナナの値段より高くなる。しかし、とりあえず実験ということで試してみることにした。この輸送機には一〇トン一度に積むことができるのである。開始の時期は、オルター・トレッド社が事務所の一階をバナナの箱詰めができるように改装できたら、ということになった。国際航路の冷蔵コンテナもどうやらそれまでに確保できそうであった。

失敗してもめげずにやり抜く

八八年一一月末、いよいよ第一回の実験が実施されることになった。

バナナは、ネグロス島中部のカンラオンという火山の山麓にある開拓農民の村から摘みだすことになった。村人たちとの打ち合わせもすべて終わり、トラックの手配もついた。バナナの箱詰めに従事するバコロド市のスラムのメンバーたちも、何回かのリハーサルをやったという。その日早朝からバナナの切り出しが始まった。午後四時にはまず三・五トンのバナナが第一便のトラックでバコロド市に到着し、早速箱詰め作業が始まり、夜



バナナの箱詰めをするスラムの互助会のメンバー

八時には無事箱詰めが終わった。後は次のトラックの到着を待つばかりである。翌早朝には、マニラから来るチャーター機に積み込みが始められるだろうと考えていた。しかし、その後に来るはずのトラックが一向に到着しない。時間は刻々と過ぎて行く。夜一〇時過ぎてやっと報せが来た。悪い知らせだった。その午後バナナ村の付近で突然軍事作戦が始まったという。切り取り作業をしていたバナナ畑にも弾丸が飛び込んでくるようになり、農民たちはバナナを放り出して逃げるしかなかったという。バナナを積んだトラックも軍事作戦の為に検問所に禁足され、すべての積荷を下ろして検査を受けていて、残りのバナナを運んで来れるのは翌日昼ごろになるという報せだった。例えばバナナを空輸しても、国際航路の出港には間に合わない。こうして第一回目の実験はあえなく中止となったのである。中止の報せを受けて、日本ではグリーン・コープの組合員たちに回覧版が回された。軍事作戦によりバナナの積み出しが中止になった経緯が回覧版を通じて一六万世帯に知らされたのである。組合員たちの「無農薬バナナ」にかける期待は大きかった。全部で九・五トンの注文が来ていた。皆、この中止の経緯に驚き、残念がった。「フィリピンでは戦争をやっているのか

：」「アキノさんになって平和だとばかり思ってたのに：」。バナナの回覧版は、こうして新聞の外国報道面で読む記事よりもっと生々しく、組合員たちの台所に飛び込んで行ったのである。

八九年の一月半ばに行った第二回目の失敗は、もっと人間的な失敗だった。

今度は前回の失敗に懲りて、バナナの産地を一カ所に頼らず四カ所に分散した。A地区からの二トンは予定どおり到着しすぐ箱詰めに回された。C地区のバナナ三トンも無事着いた。前回のカンラオン地区からの六トンが到着すればすべてオーケーである。今回は駄目押しにB地区から四トンが届くはずであった。ところがこの二台がなかなか来ないのである。夜には来る、夜中には着く、早朝には大丈夫といって徹夜で待ち続けたのだが来ない。これまでの五トンをとにかく定期国内航空便でマニラに運び、必死で次の到着を待ったが、とうとう時間切れになってしまった。またも失敗である。カンラオンからのトラックは二四時間遅れで到着した。山道で故障し、修理に手間取りこんな結果になったという。相当にガタのきた年代物のトラックである。こんなトラックしか雇えなかった不幸と諦めざるを得ない。しかし、B地区からはトラックすら来ないのである。B地区にバナ

ナ手配に送られたのはスタッフ代表の建築士君の近所に住む青年で、彼が弟のように面倒を見ていた青年だった。建築士君は見るも気の毒なほどに責任を感じており、様子を見に飛び出していった。数時間後、彼は青ざめた顔で戻ってきた。皆は最悪の事態を予想して固唾を飲んだ。ネグロスにはいたるところ自警団が銃を持って徘徊している。そんな連中に捕まって殺された例もある。しかし、B地区は比較的静かな地域だ。建築士君は一言吐き出すようにこう言った。「あの野郎、駆け落ちしやがった」。固唾を飲んで見守っていたわれわれは、意外なこと成り行きに安心すると同時に嗤然とするばかりだった。

ことの成り行きはこうである。建築士君は青年に農民に渡すバナナの代金を持たせ、トラックの手配を任せB地区に送り出した。農民にはバナナと引換に現金を渡さなくてはならない。その日の暮らしに困っている農民は現金取引でなければ作物を売らない。安くても他に持っていけば幾らの現金になる。だからバナナはすべてその場の支払いで精算される。当然青年も四トン分のバナナの代金約五千ペソを持たされた。これは彼の半年分の収入である。建築士君は前回は青年に一万ペソを預けている。その時はしっかり仕事をしてきた

八九年二月である。

品質チェックも怠りなく

のである。しかも長い付き合いである。信用していた。ところが、青年は今回ばかりは少し血が騒いだのである。B地区に行ってみると、農民たちはバナナを切り取る準備をして待っていたが青年は現れなかったのだという。建築士君は青年の母親のところに行ってみた。母親はオロオロするばかりで青年の行き先を知らない。もしかと思い、青年の恋人の家に行ってみると、どうやらその娘さんも昨日から行方知れずだという。こういう場合の結論はひとつしかない。半年分の収入に匹敵する現金を手にした青年は、それで一旗上げるつもりになってしまったのである。娘さんも貧しいネグロス島からどこか他の所へ行きたくなったのかも知れない。マニラまでの船賃は二人で三百ペソほどである。マニラのスラムに間借りすれば月八百から千ペソ。五千ペソあれば二カ月は暮らせる。その間に何か仕事が見つかるだろうというわけだ。こうしてきわめてネグロス島的な事件もあって見事に第二回の輸出も失敗してしまったのである。もちろん最大の原因は自前のトラックを持たないがために、無理のきかない運送屋に輸送を委託しなくてはならなかったことにあったのだ。

一週間後に再度輸出に挑戦し、三度目の正直で第一回のバナナ輸入の実験はどうやら成功した。

しかし、この輸入は部分的には失敗だった。送られてきた九・五トンのうち二トンがすでに相当追熟しており、傷みもひどく、黒くなった小さなバナナばかりが目立ったのである。組合員の反応も正直だった。やっと届いたネグロスのバナナをいとおしんで下さるひとが多かったが、三〇%のひとは、値段の高さと傷みのひどさにガッカリしたという感想を寄せた。値段は１キロ五六〇円。市販のバナナの二・五倍の値段である。

この部分的な失敗はバナナの輸送方法の荒さと、地域によるバナナの品質のバラツキに原因があった。村自体がある程度まとまっていて、農民たちの自主的な参加が可能な地域からのバナナは質が良いのだが、数量を確保するためには仲買人を通して買わなければならない地域もある。というのは、山岳部のバナナ畑のある農民たちの地域は軍によって「ゲリラ活動地帯」と目されており、軍の封鎖や検問、自警団のパトロール、さらには一回目のような軍事作戦の発生なども起こりうる地

域である。前回バナナ畑にまで弾丸が飛んで来たのは、それまでその地域のバナナを一手に買い取っていた仲買人が、われわれに嫉妬して軍に嫌がらせをさせたのだということがわかったのである。仲買人は大体が地元地主か資本家である。軍にも顔がきく。そこで、彼らとの無用の摩擦を避けるためには、農民と直接買取の話をしこれまでより三〇から四〇%高い価格で買い取ることを決めた後で、その価格を農民に支払うことを条件に仲買人に一定の手数料を払ってバナナを集荷して貰わなければならないという地域も出てきたのである。こうしたことがバナナの質を悪くする原因のひとつになった。さらに、段ボール箱の品質の悪さや運び出しの際の無理な扱いなどがバナナを傷ませる原因となっていた。

これらの問題を解決した上で第二回目の輸入実験を行うことになったのである。

民衆経済を發展させよう

第二回の輸入に成功するまで、ネグロスの仲間たちと色々な苦勞を重ねることになった。最大の苦勞はフィリピン社会における「インフラトラク

チャー」の不足である。これは基盤となる道路や通信施設の欠如にもっともよく現れている。「バナナ大作戦」のような実験を実際に体験すると、この点が否応なく理解できる。要するにただの民衆が経済活動に参入できるような「公益性」と「大衆性」を持った「通信・運輸手段」が全く整備されていないのである。

先に書いたようにミンダナオ島の多国籍企業のバナナ・プランテーションは専用のセメント舗装の道路を持ち、港灣設備を備え、専用の海運機能を持っている。そのための公共投資が海外援助資金などによって行われているのである。農産物を輸出し、一定の外貨を稼ぐ巨大産業だからである。しかし、一方で一万ヘクタールものバナナ農園には毎日気の遠くような量の農薬が散布されている。その総量に支払う外貨も相当に巨大な額にのぼるだろう。バナナの輸出だけが経済行為ではなく、バナナ・プランテーションで使用する農薬の販売も実に巨大な経済行為なのである。農薬会社も、外国資本か多国籍企業の独占である。フィリピン社会に還元されるものは、非常に低い労働者の賃金と外債返済に充てられる外貨収入の一部だけである。引換に広大な自然の大地がバナナに覆われ、バナナを覆う農薬で汚染されていく。バナナ産業に

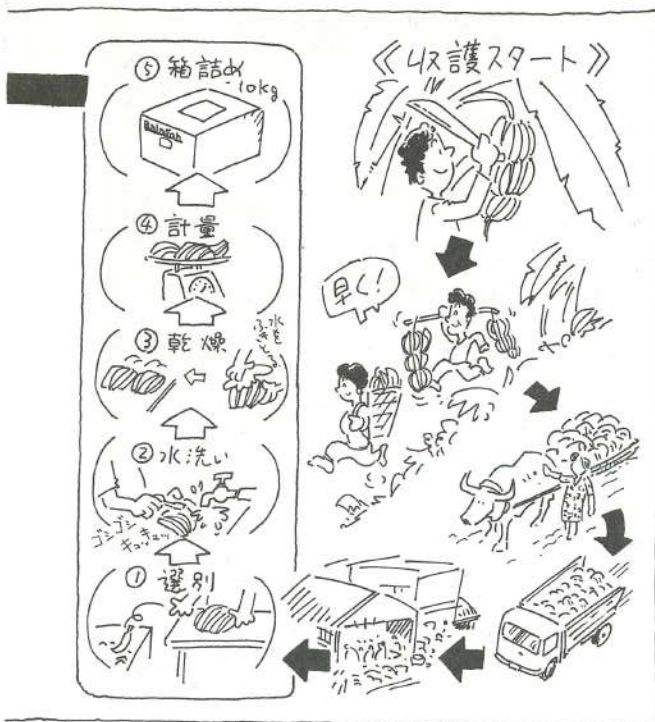


ミンダナオ島のプランテーションで栽培されているバナナ。袋をかぶせて、傷を防ぐ

関わらないひとびとにはなんら還元されない閉鎖的な独善的な経済活動なのである。自国資本の産業である海運業にしても、内国航路は、先の大量遭難を出した客船の沈没事故が雄弁に物語るように、安全性をかえりみない、公益性より私企業としての収益だけをめざす無残な状態である。勿論、ネグロスの砂糖キビ産業もその一つである。土地や資本を独占するエリート層は人口の六%に過ぎない。しかし、マルコスが海外に持ち出した巨額のドル資産がフィリピン国の外債総額の五〇%にもあたることに見られるように、エリート層は自らの一族の利益追求と保持に懸命である。こうした構造の中で、フィリピン民衆が自力で経済活動を起こし、立派に実現していくためには共に支えあう仲間が絶対に必要である。信用協同組合や生産者組合、出荷組合のような公益性と大衆性を持った民衆経済活動が発展する必然性はこの点からも明らかなのである。

台所をアジアに解放していくには

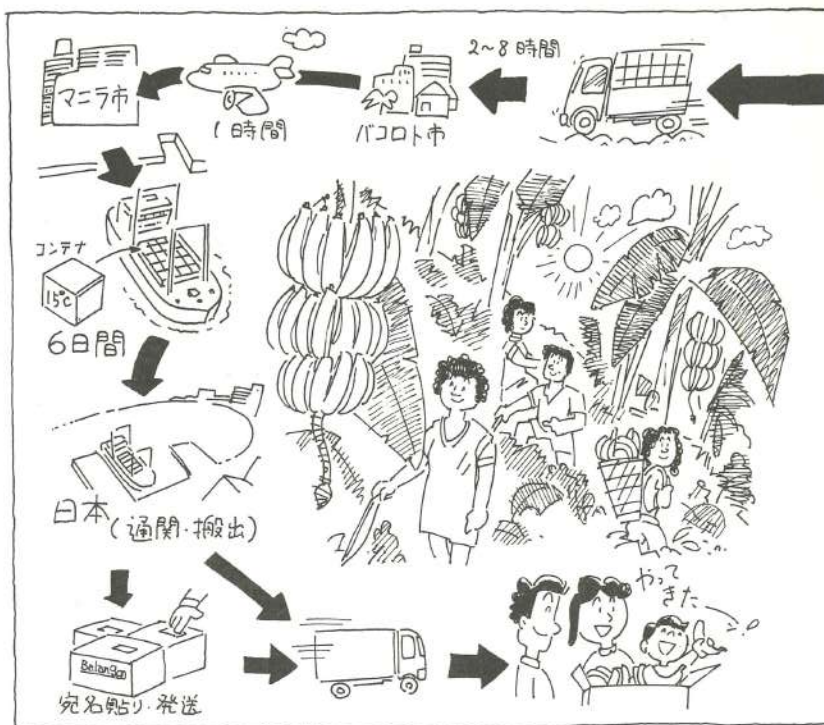
第二回目の輸入が成功した中で、ネグロスでは大きな収穫があった。それは、新しいバナナ村の



出現である。

ネグロス・オルター・トレード社は、旧来の地主・仲買人に支配される地域をさけ、できるだけ農民自身の自発的な組織化がなされているバナナの産地をさがし、提携し、ネットワークをつくり、安定的なバナナ供給を目指してきた。その中で、東ネグロス州のある村が、とても魅力的なバナナ村として浮上してきたのである。

それは、ドマゲッティ市の近郊の山の中腹に位置する戸数三百世帯の開拓村である。その村は入植してすでに四十年が立つ古い村である。村人は「焼畑農業」によって高い山の中腹に広がる斜面を切り開き、トウモロコシやバナナやマニラ麻の原料のアバカを栽培してきた。この村の特徴は、伝統的な「結」制度が未だに残っているところにある。フィリピンの農村では「バヤニハン」とよばれる相互扶助制度、つまり「結」が存在してきた。しかし、ネグロス島はほとんどが砂糖キビの農園となり、農業労働者化され、こうした農村協同体としてのシステムは崩壊してきた。伝統的な協同体にかわって七十年以後「キリスト教基礎共同体」や「労働組合」が民衆の団結と相互扶助システムとして形成されてきている。しかしこのような共同体は、地主や軍によって弾圧されたり



攻撃されたりしている。フィリピン社会の現状維持を願う彼らにとって、民衆がこのような共同体として自立し対抗してくることは恐怖なのである。また、社会的な共同体であるこれらの新しい単位には「生産を共有する文化」がまだ育ちきれていない。もともと生産手段から疎外されている例が多いからでもある。

しかし、この新しいバナナ村は、セブアノ語で「ブルホン」と呼ばれる「結制度」を現実のものとして残している。彼らは毎週「月・水・金」と村の誰かの畑を共同で耕し、残りの日々を自分の畑の仕事に使う。そして女たちがやはり共同の「かつぎ屋グループ」を形成して、換金作物であるバナナを町まで売りに行くという生活が続けてきている。しかし、町に売りにでた女たちはいつも街頭での販売を取り締まる警官と追い掛けっこを余儀無くされてきた。彼女たちは、ネグロス・オルター・トレード社がバナナを買い取る話を提案した時、「これで警官に追い掛けられないですむ」と正直に本当に喜んだという。この村には古くから「バランゴン」種のバナナが栽培されてきた。もちろん無肥料、無農薬の自然栽培である。急な斜面に無造作にたくさんバナナが植えられている。彼女たちは「日本にブルガンを送る東ネグロスの

「私たちの会」という共同出荷組合を形成した。プ

ルガンとはバランゴンのセブアノ語である。東ネグロスではセブアノ語が話されている。この「私たちの会」と日本の生協の女性たちの間で「バナナ」を仲立ちとする固い結びつきができたのである。もし、バナナの定期購入が続いていけば、彼女たちの出荷組合には組合利益が積み立てられていくだろう。ネグロス・オルター・トレード社の担当者は、ドマゲッティ市の農業普及員や農業技師を組織し、この組合をベースにこの村の農業開発を自発的に進めていきたいと計画している。急勾配の山の斜面に直接作物を植えている現在の素朴な農業から、斜面を段々畠に改良し、農地を平面にし、バナナや牧草を間作とするトウモロコシ農業を定着できたらと考えている。高地であるから家畜飼育などに適している。肉牛の飼育を始めれば新たな現金収入の道も開ける。十年計画を村人たちと共同で立案し、日本とのバナナの草の根貿易によって実現できるようにと考えている。

この村はいわばネグロス島全体にとってのパイロット・プロジェクトになろうとしている。フィリピンの女と日本の女が手を結び「いのち、暮らし、自然」を共に守れる協同が育まれるとしたら、地球全体にとっての大きな財産になっていくこと

だろう。

「無農薬バナナ」の草の根貿易はただの「美味しものの輸入」ではない。

バナナそのものの美味さより、未来を自分たちの手で共に作りだす実感と共同の喜びを実感し、わたしたち皆を「ひとつのもの」と感じるここのできる美味さを味わうことが目的なのである。ひとりひとりの手でひとりひとりの平和と正義と喜びを生み出す活動を、市民たちが自分自身で始めようとしているのである。

アジアを台所に持ち込み、台所をアジアに解放する、それが草の根貿易なのである。

（付記）この文章は一九八九年の八月に執筆された。

その後、無農薬バナナの輸入事業は本格化し、一九九〇年に入って月平均五、六〇トン単位で輸入され、日本の生活協同組合や消費者団体、ネグロス・キャンペーン委員会などを通して日本の人々の手に届けられている。

現在バナナは主に、西ネグロス州のラカルロータ市ラグランハ地区のキリスト教基礎共同体（BCC）に組織化された民衆が産地に自生するバナナの切り出し、水洗いなどの作業を行って日本へ送り出されている。

PROFILE

古沢 広祐 (ふるさわ こうゆう)

1950年生まれ。74年大阪大学理学部生物科卒業。89年京都大学大学院農学部農林経済学科博士課程修了、農学博士。現在は、目白学園女子短期大学講師(生活科学)を勤める。著書に『共生時代の食と農—生産者と消費者を結ぶ』(家の光協会)、『共生社会の論理』(学陽書房)、共著に『生活学第7冊』(ドメス出版)、『いのちと“農”の論理』『日本のワーカーズ・コレクティブ』『米—輸入か農の再生か』(学陽書房)、『もうひとつの暮らし・働き方をあなたに』(新時代社)他がある。

堀田 正彦 (ほった まさひこ)

1948年生まれ。68年より黒色テントの演劇活動に参加。その後、アジアの民衆演劇と出会う。86年、飢餓と貧困に苦しむネグロス島の砂糖キビ労働者とその子どもたちを支援するために、「日本ネグロス・キャンペーン委員会」を設立し、87年事務局長に。89年(株)オルター・トレード・ジャパンを設立し、ネグロス島の無農薬バナナやマスコバド糖の輸入を手がける。現在、同社代表。

本文中写真・長倉徳生

JCNC「手わたしバナナくらぶ」

ネグロス・キャンペーン (JCNC) では、資金面・技術面において、ネグロスの人びとの自立を目指したさまざまなプロジェクトの支援活動を行っています。ネグロスから日本に輸出されたバナナの収益金からも、そうした共同プロジェクトを支えるための資金として還元されています。

ネグロス島から「手わたされる」バナナからネグロスの人びとの想いを受け取り、日本にいる私たちも共に人間として真に豊かに生きられる社会、公正な関係を創造していくための共同作業に参加してみましょう。

「手わたしバナナくらぶ」入会のご案内

「手わたしバナナくらぶ」は会員制と予約前金制をとらせていただきます。郵便振替（東京7—145245 日本ネグロス・キャンペーン委員会）にて、入会金とご希望の量のバナナ代金が振り込まれた時点で受付とさせていただきます。（銀行振込は間違いのもとになりますのでお避け下さい）

1. 入会金：年間2,000円
2. バナナ代金：①5キロ（40～50本）1箱……3,700円
②10キロ1箱……7,000円
3. 郵便振替用紙の通信欄にバナナ申し込みであること、何月に何キロ配送希望かをご明記ください。（募金と間違えることがあります）
4. 毎月中旬から下旬にかけて1回、宅配便にて配送します。



資料請求、問い合わせは
ネグロス・キャンペーン
委員会事務局まで。

日本ネグロス・キャンペーン委員会

〒162 東京都新宿区西早稲田2-1-1 たけのこビル2階
☎03-5273-8160 FAX.03-5273-8162 郵便振替・東京7—145245

ネグロス・キャンペーン

海の向こうの隣りの国で、
何も持てなかった人たちが、
自分の力で生きる試みを始めました。
ネグロスの人たちが望んでいることは、
何かを「もらう」ことではなく、
自分の手で食べるものをつくり、
お互いに尊重しあって、
共に人間らしく生きられる
社会をつくることです。



撮影・当眞嗣光

1980年代からの砂糖価格の暴落は、砂糖の島ネグロスの経済に壊滅的な打撃を与えました。多くの失業者を出し、他に生活手段をもたない彼らを飢えが襲ったのです。86年には約15万6000人もの子どもたちが飢餓状態に陥りました。また、88年頃からは、政府軍や民兵組織と反政府勢力との衝突が激化し、その狭間で多くの人たちが生活の場と手段を奪われて「国内難民」と化し、多くの子どもたちの生命が奪われています。

1986年2月、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)が設立され、ネグロスの人びとの支援活動を開始しました。自分たちの力で食糧を生産し、人間らしい生活を営んでいくための支援、さらに環境を破壊しない自然に即した農業と、人間を蝕むことのない安全な食糧を生産する手段を確立していく、という長期的支援活動です。こうした活動はまた、国境を越えて、お互いに人間として尊重しあい公正平等な関係を共に創りあげようとする試みでもあるのです。

(ネグロスを知るために利用してください)

ビデオ「ネグロス '90—美しい5月に……」(28分) 貸出料3,000円 販売10,000円
ビデオ「カラバオ・大地の詩」(88年制作22分) 貸出料3,000円 販売10,000円
ビデオ「ネグロス・苦い砂糖の島」(86年制作20分) 貸出料3,000円 販売10,000円
スライド「国内難民」(89年制作20分) 貸出料3,000円
展示用パネル「ネグロス・生きるためのたたかい」(88年制作19枚) 貸出料3,000円
展示用パネル「ネグロス・特選写真集」(89年制作80枚)
ブックレット「ネグロスの飢餓はなぜ? I」(飢餓の背景がわかる論文集) 300円
ブックレット「ネグロスの飢餓はなぜ? II」(研究調査班報告書) 200円
ブックレット「プロジェクト報告 緊急救援・復興協力」(87年発行) 400円
文 集 「私たちにとってのネグロス」(現地訪問者の報告文集) 400円
絵はがき 「ネグロスの子どもたち」(5枚1組) / 「水牛(カラバオ)」(8枚1組) 各500円

(ネグロス・キャンペーンを支えてください)

募 金：国内難民への緊急援助から生活を立て直すための復興プロジェクトと農業研修プロジェクト
ハリーナ：ネグロス・キャンペーン委員会の機関紙購読(年6回・3,000円)
賛 同 者：1口5,000円 キャンペーン委員会の運営を支えてください。(ハリーナ購読料含む)
ツプラン会：1口5,000円 ツプラン会(農業を通して新しい生産手段としての農をネグロスと共に考えていくとする会です)の活動を支えてください。(ハリーナ購読料含む)

(株)オルター・トレード・ジャパン (A.T.J.) はネグロス・キャンペーンの活動を基盤として1989年10月に誕生した草の根商社です。

第3世界と呼ばれる南の国の人々は、「土地」や「資本」や「流通手段」を一部の人々に独占されているため、慢性的な貧困状態におかれてきました。この状態からぬけ出し、自立するには民衆自身の生産と流通の手段の確立が必要です。オルターナティブ・トレードは、民衆同士が直接手を結ぶことによって、この基盤をつくろうという試みです。

(株)オルター・トレード・ジャパンは、「もうひとつの貿易商社」として、次のような活動を行っています。

ネグロス島産 無農薬バナナの 産直輸入

A.T.J.では、フィリピン・ネグロス島の民衆団体と共同して、斜面や庭先で自然栽培したバナナを日本に輸入しています。品種はバランゴン種。甘味だけでなく酸味もある風味豊かな味わいです。日本に着いたバナナは生協や各地の共同購入グループ、ネグロス・キャンペーン実施の「手わたしバナナくらぶ」などを通じて、お届けしています。

ネグロス島産 マスコバド糖 (含蜜糖)の輸入

マスコバド糖は、砂糖キビの搾り汁をじっくり煮つめてつくった茶かっ色の砂糖です。糖蜜が分離されずに含まれているため（このような砂糖を含蜜糖といいます）、風味が豊かなうえ、カルシウムなどのミネラル類も豊富です。お惣菜、コーヒーや紅茶、お菓子など、幅広くご利用ください。また、マスコバド糖に水あめとはちみつだけを加えてくろあめも作りました。おやつに、行楽のおともにどうぞ。



(株)オルター・トレード・ジャパン事業概要

ともに生きる地球をめざして



映像・出版事業▶カラスライド

海を越えたバランゴン

1日に2回、家族に食事をさせたい
せめて小学校までは、子どもたちを学校へ通
わせたい

そんな人々の想いをのせて始まったネグロス
バナナの草の根貿易。なぜ、草の根なのか。
何が変わりつつあるのか。バナナを通じて
日本とフィリピンとのもうひとつの可能性を
探る。

製作 (株)オルター・トレード・ジャパン
カラスライド 67枚
上映時間 18分
テープ(同期信号入り)・台本付
貸出料 4,000円
販売価格 16,500円(10本以上1割引)
VHSビデオもあります(販売のみ 5,000円)。

近刊 絵本「子どものためのバナナ百科事典(仮題)」

バナナについての図鑑的解説からバナナ産地の風土や文化、料理法まで、バナナのことなら何でもわかる子どものための絵本。

(株)オルター・トレード・ジャパン (A.T.J.)

〒162 東京都新宿区西早稲田2-1-1 たけのこビル2階 ☎03-5273-8163 FAX.03-5273-8162

オルター・トレード・ブックレット①一九九〇年十月十五日発行 定価四〇〇円

発行人 堀田正彦

東京都新宿区西早稲田二ー一ー一 一たけのこビル二階

☎ (〇三) 五二七三ー八一六三

編集 オフィス ウーノ

発行 (株) オルター・トレード・ジャパン

表紙デザイン 及部克人